

なか みち  
中道遺跡 II

長野県佐久市大字前山中道遺跡 II 発掘調査報告書

2002. 3

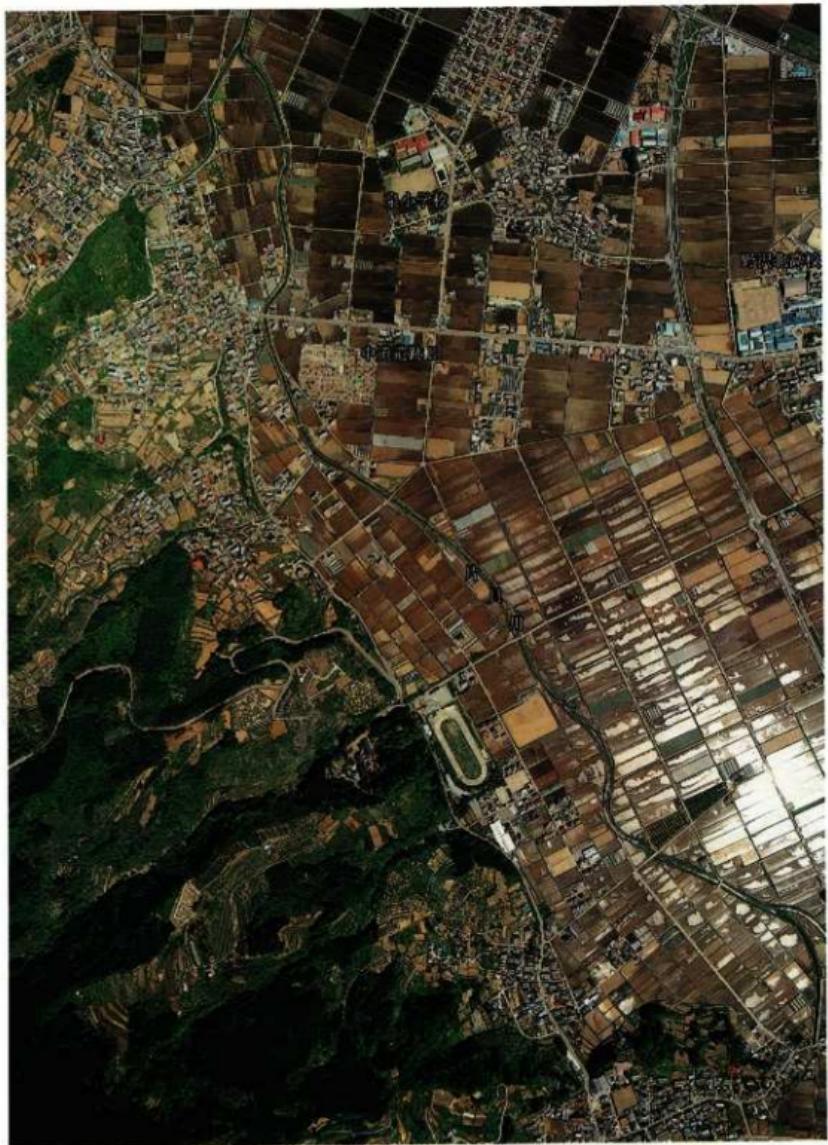
佐 久 市  
佐久市教育委員会

なか みち  
**中道遺跡Ⅱ**

長野県佐久市大字前山中道遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2002.3

佐 久 市  
佐久市教育委員会



写1 中道 Expressway Nishio area aerial photograph (vertical)



写2 中道遺跡Ⅱ周辺写真（南から）



写3 中道遺跡Ⅱ航空写真（北から） H 9年度調査区



写4 H7号住居址遺物出土状況



写5 H15号住居址遺物出土状況



图6 H7号住居址出土遗物



图7 H15号住居址出土遗物

## 例　　言

- 本書は平成9年度から行われた佐久市による公営住宅建設事業、泉団地建替工事に伴う発掘調査報告書である。
- 調査委託者 平成9年度 佐久市建築課、平成11・13年度 佐久市都市計画課
- 調査受託者 佐久市教育委員会
- 遺跡名 中道遺跡II（NA II）
- 所在地 佐久市大字前山106-5.113-1.113-2.113-6.113-8.113-9.113-10.113-11.113-12.113-13.114-2.114-4.  
114-6.114-7.115-2.115-3.115-4.115-3.115-5.115-1.115-6.115-8.115-9
- 調査年度及び調査面積 平成9年度 1,280m<sup>2</sup> 平成11年度 1,200m<sup>2</sup> 平成13年度 560m<sup>2</sup>
- 調査担当者 平成9年度調査（現場） 富沢 一明  
平成11・13年度調査（現場） 上原 学
- 本書の執筆・編集は上原が行った。
- 本書及び出土品は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡　　例

- 遺構の略号は以下のとおりである。

H—竪穴住居址 M—溝状造構 D—土坑 P—ピット

- スクリーントーンによる表示は以下のとおりである。

遺構



遺物



- 拝図縮尺は以下のとおりである。

遺構 竪穴住居址-1/80 溝状造構-1/100 ピット-1/80 土坑-1/60

遺物 上部器・須恵器-1/4 石類-1/3. 2/3 玉類-1/1

- 写真図版の遺物番号と遺構の実測番号は同一である。

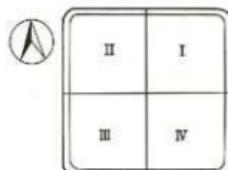
- 遺構の標高は各遺構ごとに統一し、水系高を標高とした。

- 土層・遺物の色調は「新版 標準土色帖」による。

- 調査グリッドは4×4mである。

- 住居址の区割りは上を北とし、北東隅から逆時計回りである。

- 玉類の計測は図のとおりである。



## 目 次

### 例言・凡例

### 目次

#### 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 立地と経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 遺跡の概要	2

#### 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然環境	4
第2節 周辺遺跡	5
第3節 基本層序	7

#### 第Ⅲ章 遺構と遺物

##### 第1節 積穴住居址

H 1号住居址	9	H 2号住居址	10
H 3号住居址	12	H 4号住居址	14
H 5号住居址	15	H 6号住居址	16
H 7号住居址	18	H 8号住居址	21
H 9号住居址	25	H 10号住居址	26
H 11号住居址	28	H 12号住居址	30
H 13号住居址	31	H 14号住居址	32
H 15号住居址	32	H 16号住居址	35
H 17号住居址	36		

第2節 溝状遺構 M 1～M 2	37
------------------	----

第3節 土坑 D 1～D 4	39
----------------	----

第4節 ピット群 1群～5群	40
----------------	----

第5節 遺構外遺物	41
-----------	----

まとめ	44
-----	----

## 図 版

第1図 中道遺跡II位置図 (1:100,000) .....	1	第26図 H8号住居址遺物実測図 (2) .....	23
第2図 中道遺跡II位置図 (1:10,000) .....	5	第27図 H8号住居址遺物実測図 (3) .....	24
第3図 中道遺跡II周辺遺跡図 (1:50,000) .....	7	第28図 H9号住居址・遺物実測図 .....	25
第4図 基本層序模式図 .....	7	第29図 H10号住居址実測図 .....	26
第5図 中道遺跡II遺構配置図 (1:600) .....	8	第30図 H10号住居址遺物実測図 (1) .....	27
第6図 H1号住居址実測図 .....	9	第31図 H10号住居址遺物実測図 (2) .....	28
第7図 H1号住居址遺物実測図 .....	10	第32図 H11号住居址実測図 .....	29
第8図 H2号住居址実測図 .....	11	第33図 H11号住居址遺物実測図 .....	29
第9図 H2号住居址遺物実測図 .....	11	第34図 H12号住居址・遺物実測図 .....	30
第10図 H3号住居址実測図 .....	12	第35図 H13号住居址・遺物実測図 .....	31
第11図 H3号住居址遺物実測図 (1) .....	12	第36図 H14号住居址・遺物実測図 .....	32
第12図 H3号住居址遺物実測図 (2) .....	13	第37図 H15号住居址実測図 .....	33
第13図 H4号住居址実測図 .....	14	第38図 H15号住居址遺物実測図 .....	34
第14図 H4号住居址遺物実測図 .....	15	第39図 H16号住居址・遺物実測図 .....	35
第15図 H5号住居址実測図 .....	15	第40図 H17号住居址・遺物実測図 .....	36
第16図 H5号住居址遺物実測図 .....	16	第41図 M1・2号溝状遺構実測図 .....	37
第17図 H6号住居址実測図 .....	17	第42図 M1号溝状遺構遺物実測図 (1) .....	37
第18図 H6号住居址遺物実測図 .....	17	第43図 M1号溝状遺構遺物実測図 (2) .....	38
第19図 H7号住居址実測図 (1) .....	18	第44図 M2号溝状遺構遺物実測図 .....	39
第20図 H7号住居址実測図 (2) .....	19	第45図 土坑実測図 .....	39
第21図 H7号住居址遺物実測図 (1) .....	19	第46図 ピット群実測図 .....	40
第22図 H7号住居址遺物実測図 (2) .....	20	第47図 遺構外遺物実測図 (1) .....	41
第23図 H8号住居址実測図 .....	21	第48図 遺構外遺物実測図 (2) .....	42
第24図 H8号住居址掘方実測図 .....	22	第49図 遺構外遺物実測図 (3) .....	43
第25図 H8号住居址遺物実測図 (1) .....	22	第50図 中道遺跡II土器編年表 (古墳時代) .....	45

## 表 目 次

第1表 中道遺跡II周辺遺跡表 .....	6	第7表 H3号住居址石類観察表 .....	14
第2表 H1号住居址遺物觀察表 .....	10	第8表 H4号住居址遺物觀察表 .....	15
第3表 H1号住居址石類観察表 .....	10	第9表 H4号住居址石類観察表 .....	15
第4表 H2号住居址遺物觀察表 .....	11	第10表 H5号住居址遺物觀察表 .....	16
第5表 H2号住居址石類観察表 .....	11	第11表 H6号住居址遺物觀察表 .....	18
第6表 H3号住居址遺物観察表 .....	13	第12表 H6号住居址石類観察表 .....	18

第13表	H 7号住居址遺物観察表	20	第26表	H14号住居址遺物観察表	32
第14表	H 7号住居址石類観察表	20	第27表	H15号住居址遺物観察表	35
第15表	H 7号住居址玉類観察表	21	第28表	H15号住居址石類観察表	35
第16表	H 8号住居址遺物観察表	24	第29表	H16号住居址遺物観察表	36
第17表	H 8号住居址石類観察表	25	第30表	H17号住居址遺物観察表	36
第18表	H 9号住居址遺物観察表	26	第31表	M1号溝状遺構遺物観察表	38
第19表	H10号住居址遺物観察表	28	第32表	M1号溝状遺構石類観察表	38
第20表	H10号住居址石類観察表	28	第33表	M1号溝状遺構玉類観察表	38
第21表	H10号住居址玉類観察表	28	第34表	M2号溝状遺構遺物観察表	39
第22表	H11号住居址遺物観察表	29	第35表	M2号溝状遺構石類観察表	39
第23表	H11号住居址石類観察表	30	第36表	土坑観察表	39
第24表	H12号住居址遺物観察表	31	第37表	遺構外遺物観察表	43
第25表	H13号住居址遺物観察表	31	第38表	遺構外石類観察表	44

## 写真図版

### 巻頭カラー

写1 中道遺跡II周辺航空写真（垂直）

写2 中道遺跡II周辺写真（南から）

写3 中道遺跡II航空写真（北から）H9年度調査区

写4 H7号住居址遺物出土状況

写5 H15号住居址遺物出土状況

写6 H7号住居址出土遺物

写7 H15号住居址出土遺物

### 本文中

調査風景（西から）H9年度調査区 ..... 3 佐久平周辺航空写真（南から） ..... 4

## 写真図版

図版1 中道遺跡II遠景（西から）

H11年度調査風景

中道遺跡II全景（南から）H9年度調査区

H11年度調査風景

H13年度調査風景

図版2 中道遺跡II近景（西から）H9年度調査区

図版5 H1号住居址全景（西から）

中道遺跡II全景（垂直）H9年度調査区

H1号住居址カマド（西から）

図版3 中道遺跡II全景（南東から）H11年度調査区

H1号住居址掘方（西から）

中道遺跡II全景（南から）H13年度調査区

H2号住居址全景（南から）

H2号住居址掘方（南から）

図版4 H9年度調査風景

図版6 H3号住居址全景（南から）

H9年度調査風景

H 3 号住居址遺物出土状況	H11号住居址全景（南から）
H 3 号住居址掘方（南から）	H11号住居址カマド（南から）
H 4 号住居址全景（南から）	H11号住居址掘方（南から）
H 4 号住居址カマド（南から）	
図版 7 H 4 号住居址カマド掘方（南から）	H12号住居址全景（南から）
H 4 号住居址掘方（南から）	H12号住居址カマド（南から）
H 5 号住居址全景（南から） H19年度調査分	H12号住居址掘方（南から）
H 5 号住居址掘方（南から） H19年度調査分	H13号住居址全景（西から） H11年度調査分
H 5 号住居址全景（東から） H11年度調査分	H13号住居址全景（南西から） H13年度調査分
H 5 号住居址掘方（西から） H11年度調査分	
図版 8 H 6 号住居址全景（南から）	H13号住居址カマド（南から）
H 6 号住居址遺物出土状況	H13号住居址カマド（東から）
H 6 号住居址カマド（南から）	H13号住居址カマド掘方（南から）
H 6 号住居址掘方（南から）	H13号住居址掘方（北西から） H11年度調査分
H 7 号住居址全景（南から）	H13号住居址掘方（南から） H13年度調査分
図版 9 H 7 号住居址カマド（南から）	H14号住居址全景（北西から）
H 7 号住居址遺物出土状況（1）	H14号住居址掘方（北から）
H 7 号住居址遺物出土状況（2）	H15号住居址確認状況（北西から）
H 7 号住居址遺物出土状況（3）	H15号住居址全景（南東から）
H 7 号住居址遺物出土状況（4）	H15号住居址全景（南西から）
図版10 H 7 号住居址遺物出土状況（5）	H15号住居址カマド（西から）
H 7 号住居址掘方（南から）	H15号住居址カマド（東から）
H 8 号住居址全景（南から）	H15号住居址遺物出土状況（1）
H 8 号住居址カマド（南から）	H15号住居址遺物出土状況（2）
H 8 号住居址掘方（南から）	H15号住居址カマド西側土坑
図版11 H 9 号住居址全景（南から）	H15号住居址カマド掘方（東から）
H 9 号住居址掘方（南から）	H15号住居址カマド掘方（南から）
H 10号住居址全景（西から）	H15号住居址遺物出土状況（3）
H 10号住居址カマド（西から）	
H 10号住居址遺物出土状況	H16号住居址全景（西から）
図版12 H 10号住居址遺景（西から）	H16号住居址遺物出土状況（1）
H 10号住居址掘方（西から）	H16号住居址遺物出土状況（2）
	H16号住居址遺物出土状況（3）
	H16号住居址掘方（北から）
図版18 H 17号住居址全景（南から）	

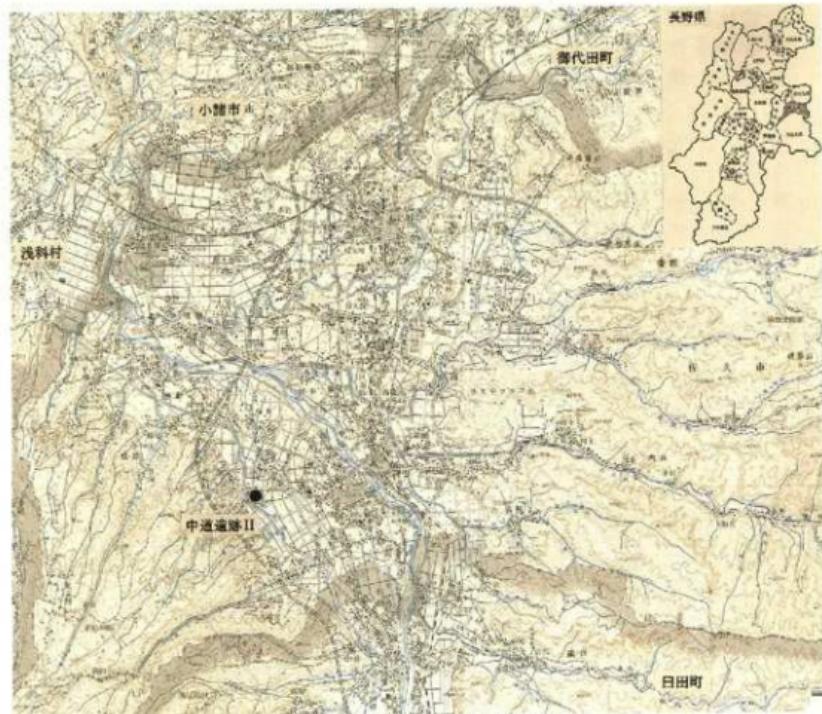
- M 1・2号溝状遺構全景（北西から）
- 図版19 M 1・2号溝状遺構全景（北から）
- M 1・2号溝状遺構全景（南から）
- 図版20 D 1号土坑全景
- D 2号土坑全景
- 図版21 D 3号土坑全景
- D 4号土坑全景
- 図版22 ピット群1全景（東から）
- ピット群5全景（北西から）
- 図版23 H 1・2号住居址遺物
- 図版24 H 3号住居址遺物
- 図版25 H 3・4・5号住居址遺物
- 図版26 H 5・6・7号住居址遺物
- 図版27 H 7号住居址遺物
- 図版28 H 8号住居址遺物
- 図版29 H 8号住居址遺物
- 図版30 H 8・9・10号住居址遺物
- 図版31 H 10・11号住居址遺物
- 図版32 H 12・13・14・15号住居址遺物
- 図版33 H 15号住居址遺物
- 図版34 H 16・17号住居址、M 1号溝状遺構遺物
- 図版35 M 1号溝状遺構遺物
- 図版36 M 1・2号溝状遺構、遺構外遺物
- 図版37 遺構外遺物
- 図版38 遺構外遺物
- 図版39 遺構外遺物
- 図版40 遺構外遺物

# 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

## 第1節 立地と経過

中道遺跡は大字前山に所在し、野沢平西方の千曲川と片貝川に挟まれた沖積低地に立地する。標高は670m内外を測る。遺跡内では昭和46年の発掘調査により、古代の竪穴住居址が検出され土師器・須恵器の他奈良三彩の蓋などが出土している。また遺跡の北300mに所在する三千束遺跡群の南東端では平成6年に寺添遺跡の調査が行われ、古墳・奈良時代の竪穴住居址などが29軒検出され、土師器・須恵器・白玉といった遺物が出土している。

今回、佐久市による公営住宅建て替え工事が行われることとなり、遺構の確認調査を実施した結果、古代の竪穴住居址などが認められたことから、佐久市教育委員会が主体となり、遺構の記録保存を目的として発掘調査を行う運びとなった。なお、発掘調査は建て替え工事計画に合わせ、平成9・11・13年の3回行われた。



第1図 中道遺跡II位置図 (1:100,000)

## 第2節 調査体制

平成9年度

教育長 依田 英夫  
教育次長 市川 源  
埋蔵文化財課長 須江 仁胤  
管理係長 樋沢 康子  
埋蔵文化財係長 大塚 達夫  
埋蔵文化財係 林 幸彦 三石 宗一 須藤 隆司 小林 真寿 羽毛田 卓也  
富沢 一明 上原 学  
調査主任 佐々木 宗昭 森泉 かよ子

平成11年度

教育長 依田 英夫  
教育次長 小林 宏造  
文化財課長 草間 芳行  
文化財係長 萩原 一馬  
文化財係 林 幸彦 須藤 隆司 小林 真寿 羽毛田 卓也 富沢 一明  
上原 学 山本 秀典 出澤 力  
調査主任 佐々木 宗昭 森泉 かよ子

平成13年度

教育長 依田 英夫(4~6月) 高柳 勉(7月~)  
教育次長 小林 宏造(4~5月) 黒沢 俊彦(5月~)  
文化財課長 草間 芳行  
文化財係長 萩原 一馬(4~5月) 森角 吉晴(5月~)  
文化財係 林 幸彦 須藤 隆司 小林 真寿 羽毛田 卓也 富沢 一明  
上原 学 山本 秀典 出澤 力  
調査主任 佐々木 宗昭 森泉 かよ子

平成9・11・13年度

調査員 岩崎 重子、岩下 吉代、岩下 友子、岩下 文子、上原 芳男、  
碓氷 知子、大井みつる、小幡 弘子、柏木 義雄、金森 治代、  
小林よしみ、佐々木 正、佐々木久子、佐藤志げ子、佐藤 則、  
間口 正、田中 章雄、中島とも子、中條 悅子、成澤 富子、  
林 幸男、比田井久美子、堀籠 因、武者 幸彦、桃井もとめ、  
山村 容子、若林 希、渡邊 久美子、渡辺 信男、

## 第3節 遺跡の概要

遺跡名 中道遺跡II(NA II)

所 在 地 佐久市大字前山字中道113-1他23筆

調査期間 平成9年8月25日～10月3日（現場）  
平成11年7月30日～8月11日（現場）  
平成13年4月3日～4月20日（現場）  
平成9年10月3日～平成14年3月29日（整理）

調査面積 1,280m<sup>2</sup>（平成9年度） 1,200m<sup>2</sup>（平成11年度） 560m<sup>2</sup>（平成13年度）

調査遺構 壁穴住居址 古墳時代 10軒 古墳時代以降 4軒 不明 2軒 弥生時代 1軒  
土坑 4基  
溝状遺構 2条  
ピット

出土遺物 土師器（壺・甕・鉢・高壺・瓶）  
須恵器（甕・壺・高壺・壺・横瓶・瓶）  
弥生式土器（甕・壺）  
石類（石包丁・紡錘車・打製石斧・擦り石・砥石・台石・剥片・磨き石）  
玉類（白玉）  
古錢（祥符元寶・聖宋元寶）  
繩文土器片



調査風景（西から） H9年度調査区

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 自然環境

佐久地域は、周囲を山地・台地に囲まれた盆地状を呈し、一般に佐久平と呼ばれ、北方には現在も活動を続け白煙を立ちのぼらせる浅間山、南方に蓼科山が存在する。東方には北関東山地の北端があり、群馬県との境をなしている。西方には御牧原・八重原といった台地が広がり、蓼科西端の裾野と接している。そしてこの佐久平を大きく二分するかのように一級河川である千曲川が南方の南佐久方面から沢筋の支流を集めながら水量を増しつつ佐久市内に流れ込む。市内にはいると、野沢付近まで北流した川筋をやや北西方向に変え、蓼科山麓の支流を集めた片貝川、浅間山の東麓に源を発す湯川、関東山地からの支流である田子川、志賀川などを集めた滑津川といった河川と合流し市街へと至る。

また佐久地域は地質学的に南北で大別でき、この境界は、佐久平のほぼ中央である志賀川が滑津川と合流して千曲川に注ぐ東西線を境として、河川の北側段丘上は680m、南側は650mを測り、30m内外の比高差の断崖を認めることができる。北部地域は、北の浅間山の山麓末端部の平坦な台地で、浅間山の噴火によって台地表面に堆積した軽石流は、雨水による浸食に弱く、長い年月の間に深く削りとられ、浅間山の麓から放射状に幾筋にも浸食谷（田切り地形）を形成し、切り立った断崖により台地を細長く分断している。

これに対し、南部地域は千曲川の氾濫源沖積地と滑津川の谷口扇状地で、河床礫層と沖積粘土層地帯で地下水位も高く、安定した土地である。このため南部一帯は広く水田として利用されていた。

今回調査対象となった中道遺跡は、佐久平南部の千曲川と片貝川に挟まれた標高670m内外の氾濫源沖積地上に展開し、周辺は現在も広く水田として利用されている。



佐久平周辺航空写真（南から）

## 第2節 周辺遺跡

中道遺跡は佐久市南部の千曲川と片貝川に挟まれた標高670m内外の氾濫源沖積地上に展開し、西方には蓼科山の裾野がのび、この一帯には先土器時代から中世に至る遺跡が存在し、多くの発掘調査が行われている。これらの遺跡を時代別に概観したい。

まず、先土器時代の遺跡としては、当遺跡南西方向6kmの山麓中に立科F遺跡がある。調査によって211点からなる石器群が検出され、検出層位から31200±900年前の年代が与えられている。続く縄文時代の遺跡としては、前期前半の住居址6軒が調査された後沢遺跡、中期後半の住居址16軒が調査された中村遺跡、崎村B・山法師B遺跡などがある。また、前山地蔵の瀧の下遺跡からは、後期の敷石住居址2軒が検出され、そのうち1号住居址の敷石は炉の周辺に菱形に敷かれていた。周辺地域の縄文時代の遺跡は、その多くが山



第2図 中道遺跡II位置図 (1:10,000)

地沿いの谷間か水田面に接する山裾周辺に広がっており、沖積低地での集落址は未だ発見されていない。

次に弥生時代の遺跡としては、水田面を見下ろす丘陵上に位置する後沢遺跡で中期栗林期3軒、後期稻清水期32軒の住居址、方形周溝墓3基が調査されている。また、同じ様な地形にある西裏・竹田峯遺跡からは中期栗林期9軒、後期稻清水期5軒の住居址とともに、後期に比定される壺棺が検出され、壺内より胎児骨一体と管玉・ガラス小玉が発見された。

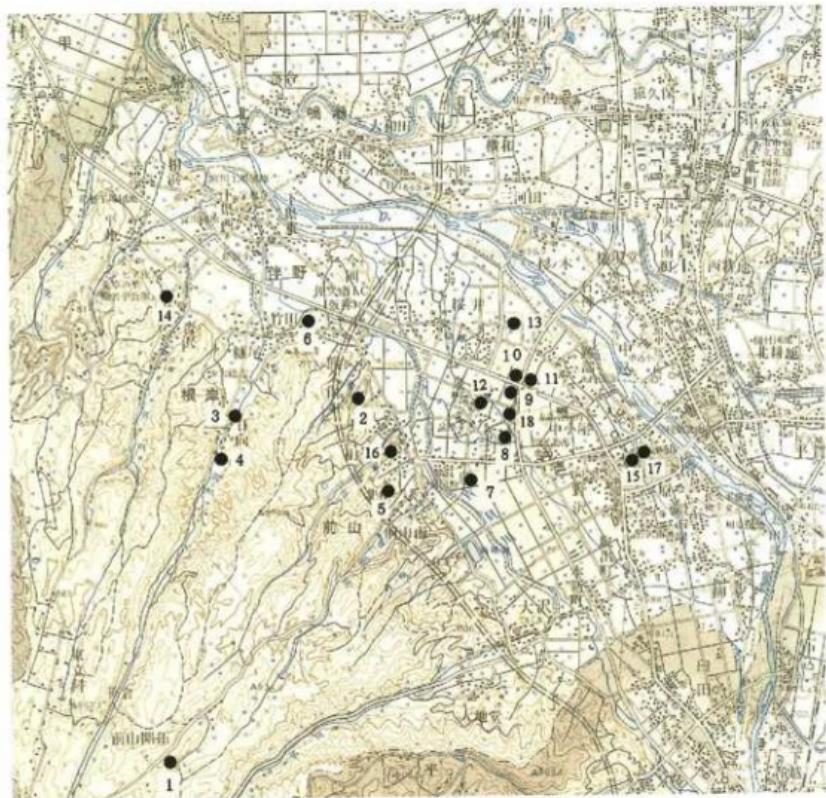
古墳時代になると遺跡は沖積低地まで広がり始める。圃場整備などで調査された遺跡も多く、本遺跡を始め、寺添遺跡、市道遺跡、三塚町田遺跡、跡部町田遺跡、三塚鶴田遺跡、上桜井北遺跡などが上げられる。これらの遺跡はいずれも自然堤防上や微高地上に立地しており、中期後半から後期に及ぶ集落である。古墳址は調査されたものは少なく、根岸地籍の様名平・坪の内遺跡で後期から終末期に属する横穴式石室の古墳址が1基と坪の内古墳が調査されたにとどまっている。なお佐久平においては、千曲川左岸の低地や山地には古墳址が少なく、千曲川右岸の山裾には群集墳が集中して存在する極めて対照的な様相を示している。

奈良・平安時代は前代と同様な様相を示し、低地と山裾に小規模な集落址が確認されている。しかし、調査された遺跡範囲がいずれも小規模である為、今後、長土呂地籍の聖原遺跡の様な大規模な集落址が発見される可能性はある。また、以前行われた中道遺跡及び様名平遺跡からは奈良三彩の壺が出土しており注目される。鎌倉時代以降になると伴野氏の活躍が始まる。方形の区画を持つ野沢館跡や山城として良好な保存状態を保つ前山城跡は伴野氏によって築かれたものとされ、「一遍上人絵伝」にも当時の伴野氏館の活況な様子が描かれている。様名平遺跡からは中世後期と考えられる土壙墓・火葬墓といった墳墓群が検出されている。近年では薬師寺本堂改築に伴う薬師寺遺跡の調査が行われ、近世中期から近現代の遺物が出土している。

(佐久市埋蔵文化財調査報告書 第44集 寺添遺跡 歴史的環境 一部改訂)

No	遺跡名	所在地	立地	旧 縄 糸 赤 古 巣 中 近 備 考				
1	立井F遺跡	前山字立井	山地	○				平成2年調査
2	後沢遺跡	小宮山字後沢	丘陵	○ ○ ○ ○				昭和51・52年調査
3	中村遺跡	根岸字日向	山地	○				昭和57年調査
4	傳村B・山法師B遺跡	根岸字日向	山地	○			○	平成3・4年調査
5	瀧の下遺跡	前山字瀧の下	丘陵	○				平成2年調査
6	西裏・竹田峯遺跡	根岸字西浦・竹田峯	丘陵先端		○ ○ ○			昭和60年調査
7	中道遺跡	前山字中道	沖積、微高地		○ ○ ○			昭和46年調査
8	寺添遺跡	三塚字寺添	*		○ ○			平成6年調査
9	市道遺跡	三塚字市道	*		○ ○ ○	○		昭和49年調査
10	三塚町田遺跡	三塚字町田	*		○			昭和50年調査
11	跡部町田遺跡	跡部字町田	*		○			昭和46年調査
12	三塚鶴田遺跡	三塚字鶴田	*			○		昭和50年調査
13	上桜井北遺跡	桜井字櫛越	*		○ ○			昭和52年調査
14	様名平・坪の内遺跡	根岸字様名平・坪の内	丘陵	○ ○ ○ ○ ○				平成5・6年調査
15	野沢館跡	野沢字宿間敷・北田	沖積、微高地		○ ○			
16	前山城跡	小宮山字城山	山地		○ ○			
17	衛御寺遺跡	原字崖敷	沖積、微高地			○ ○		平成11年調査
18	宮添遺跡	三塚字宮添	*		○ ○ ○			平成11年調査

第1表 中道遺跡II周辺遺跡表



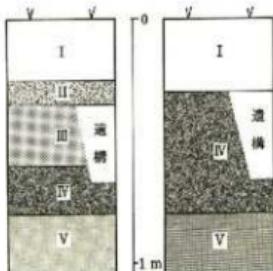
第3図 中道遺跡II周辺地図 (1:50,000)

### 第3節 基本層序

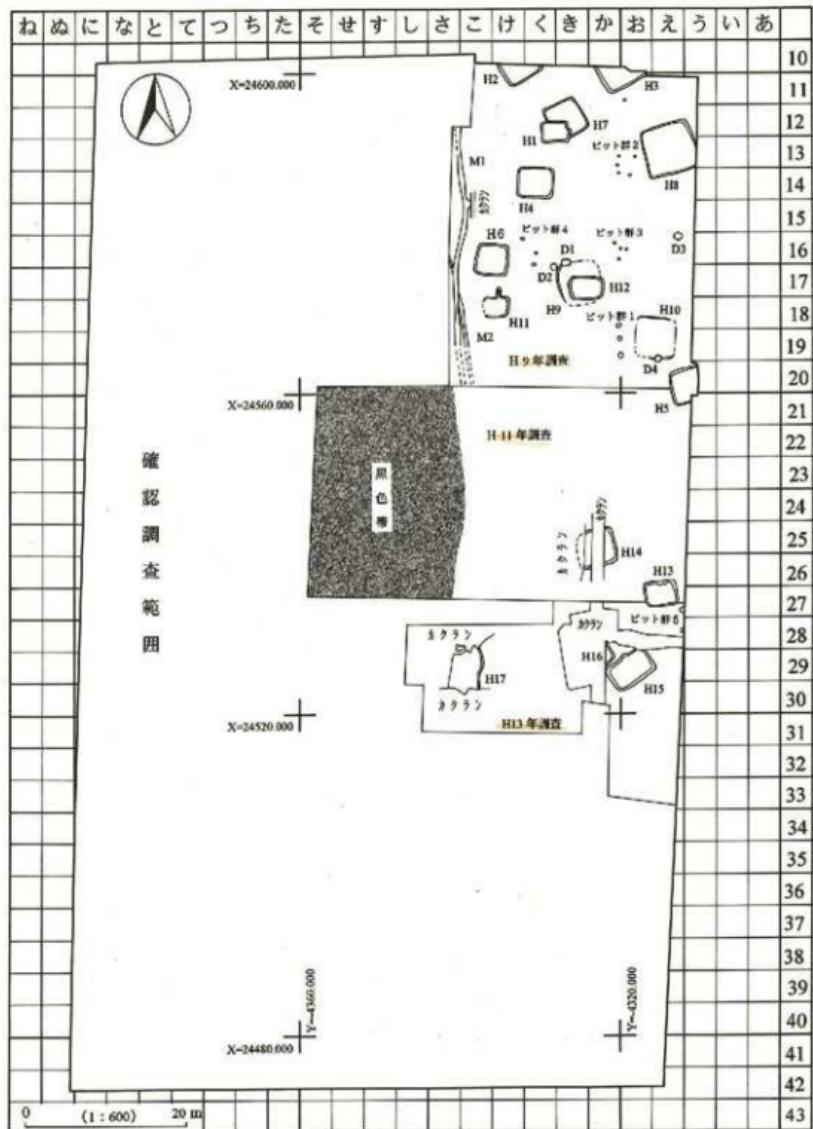
遺跡は千曲川左岸の氾濫源沖積地に所在し、西にはおよそ南から北方向に流れる片貝川が存在する。このため付近の層序は基本的に氾濫源特有の河床疊、沖積粘土層によって構成されている。

調査対象地は旧泉田地建設に際し、水田上部に盛り土整地されており、層序は調査区北では上から盛り土、旧水田面、黒色土、黄色シルト質土、砂礫層となり、南では盛り土、黄色シルト、砂礫層であった。このうち古代の遺構は北では黒色土、南では黄色シルト質土上面にて検出可能であった。

- |        |                        |
|--------|------------------------|
| I 盛土   | III 黒色土 粘性土、二酸化鉄多。強熱性。 |
| II 水田面 | IV 黄色土 砂多いシルト質。        |
|        | V 砂礫層 川砂利              |



第4図 基本層序模式図



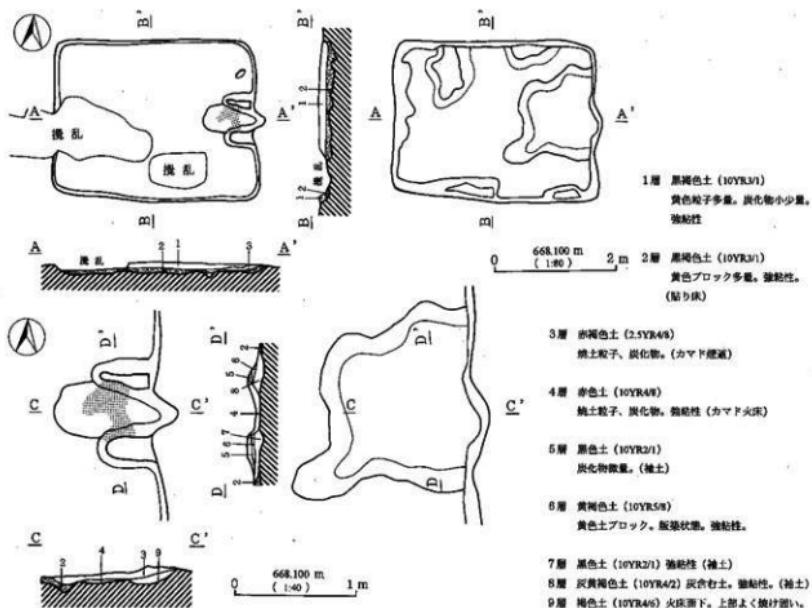
第5圖 中道遺跡II遺構配置圖 (1:600)

50-48

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

### 第1節 穂穴住居址

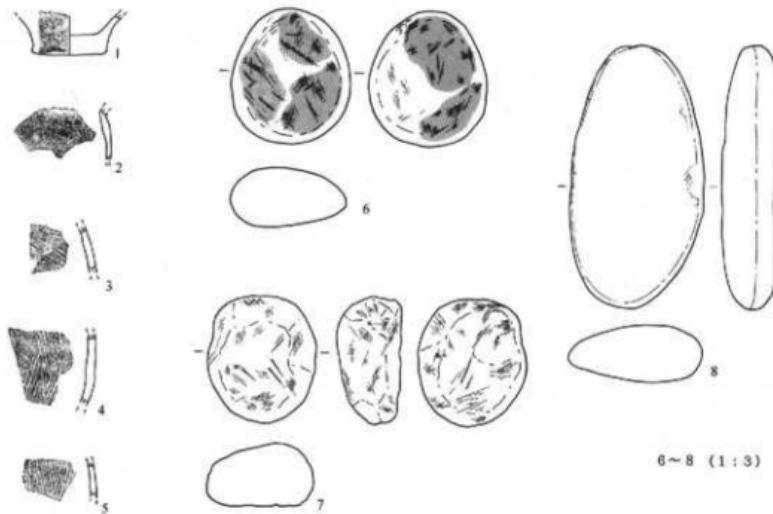
#### H 1号住居址



第6図 H 1号住居址実測図

遺構は調査区北のき-12グリットに位置し、H7号住居址を切る。覆土は黄褐色土粒子を多量に含む、強粘性の黒褐色土である。規模は南北2.7m、東西3.3m、床面までの深さ13cmを測る。平面形は東西に長い隅丸長方形である。壁面は掘り込まれている地山が強粘性であるため固く安定している。床面は踏み固められた状態で、ほぼ平坦である。ピットは認められなかった。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、粘土で構築された袖が火床を挟み込むように40cmほどのびていた。火床には厚さ5cm内外の焼土が認められた。掘方は黄色シルトブロックを含む黒褐色土が埋め込まれ、この上面を床面として利用していた。

遺物は土師器、弥生式土器、擦り石、敲き石が出土した。遺物は小破片が大半で、図示したのは8点である。1～5は土師器だが、本住居址掘方付近からの出土のため混入又はH7の遺物である可能性がある。1は壺または壺の底部である。底部ナア、外面彫状工具による調整痕が認められる。2～5は壺または壺の体部破片で外面条線を施す。6は輝石安山岩製の擦り石、7は安山岩製で擦り、砥石と多目的に使用している。8は輝石安山岩製の敲き石である。本住居址は遺物が僅かなことから時期断定はできないが、H7を確実に切ることから5世紀後半以降と考えられる。



第7図 H1号住居址遺物実測図

番号	器種	基部	L1所	底所	厚所	摘要・文様	残存率・部位	形状	色調(外側) (内側)
1	土師器	-	-	5.1	-	底面ハラ削り目ナメ 外面擦目状工具によるナメ	底面～体部の一帯	真	暗褐色 明褐色
2	土師器	-	-	-	-	外表面状工具によるナメ	底面～体部前方	真	暗褐色 明褐色
3	土師器	-	-	-	-	外表面状工具によるナメ・赤色進形 内面ハラナメ	胴部裏片	真	暗褐色 赤色
4	土師器	-	-	-	-	外表面状工具によるナメ・内面ハラナメ	胴部張片	真	暗褐色 弱い褐色
5	土師器	-	-	-	-	外表面状工具によるナメ・内面ハラナメ	胴部張片	真	暗褐色 灰褐色

第2表 H1号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
6	擦り石	輝石安山岩	8.3	7.3	4.7	359	8	擦り石	輝石安山岩	16.1	8.3	3.4	105
7	擦り石	安山岩	7.8	6.8	4	243							

第3表 H1号住居址石類観察表

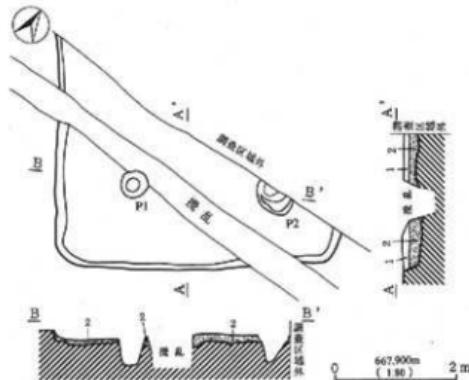
## H2号住居址

這構は調査区北端のけー10グリッドに位置し、住居址の半分は調査区外となる。覆土は炭化物を微量に含む強粘性の黒色土である。規模は東西4.4m、南北は確認された最大で3.5m、床面までの深さは10cm内外を測る。平面形は確認状況から隅丸の方形と考えられる。壁面は地山が強粘性であることから固く安定し、床面は踏み固められた状態で、ほぼ平坦である。ピットは南側主柱穴と思われるピットが2個確認できた。カマドは確認できなかった。掘方は中央に比して周囲を深く掘り下げ、強粘性の黄色シルト粘土と黄土プロックの混合土を埋め込み、上面を床面として利用していた。埋め土の厚さは8~20cmを測る。

遺物は弥生式土器片・土師器片・擦り石が出土した。図示したのは4点である。1、2は弥生式土器壺の

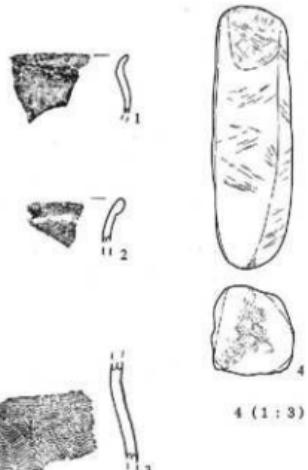
口縁破片と思われ、2は二重口縁で外面下部に櫛状波状文が認められる。3は壺胴部から頸部にかけての破片である。4は輝石安山岩製の擦り石である。

本住居址からは弥生式土器・土師器の小破片が出土し、造模は全体が確認できず、カマドまたは炉の存在も認められなかったことから時期の確定はできなかった。



第8図 H2号住居址実測図

1層 黒色土 (10VR31) 炭化物微量。粘性  
2層 黄褐色土 (10YR5/8) 黄色シルト質土と黄色ブロックの  
混合土。  
よく踏み固められている。



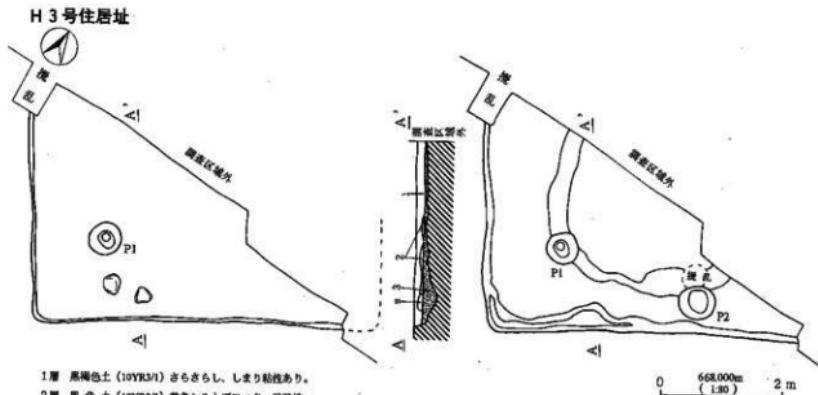
第9図 H2号住居址遺物実測図

番号	器種	形	口径cm	底径cm	高さcm	質・型・文様		既存車・部位	既成	色調(外側) (内側)
						質	型			
1	弥生式土器	壺	-	-	-	口縁直ツラ 内面ヘラナギ		口縁破片	良	黒灰色 黄褐色
2	弥生式土器	壺	-	-	-	口縁二重口縁 外面櫛状波状文		口縁破片	良	黄褐色 黄褐色
3	弥生式土器	壺	-	-	-	口辺・底部外面櫛状波状文 壺底外面櫛状波状文		壺底外面波状文	良	黄褐色 黄褐色 黄褐色 黄褐色 黄褐色 黄褐色

第4表 H2号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
4	擦り石	輝石安山岩	16	5	5.5	596

第5表 H2号住居址石類観察表

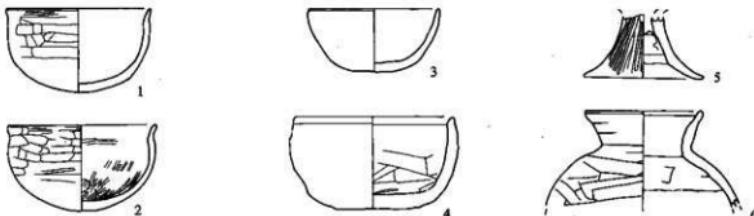


第10図 H 3号住居址実測図

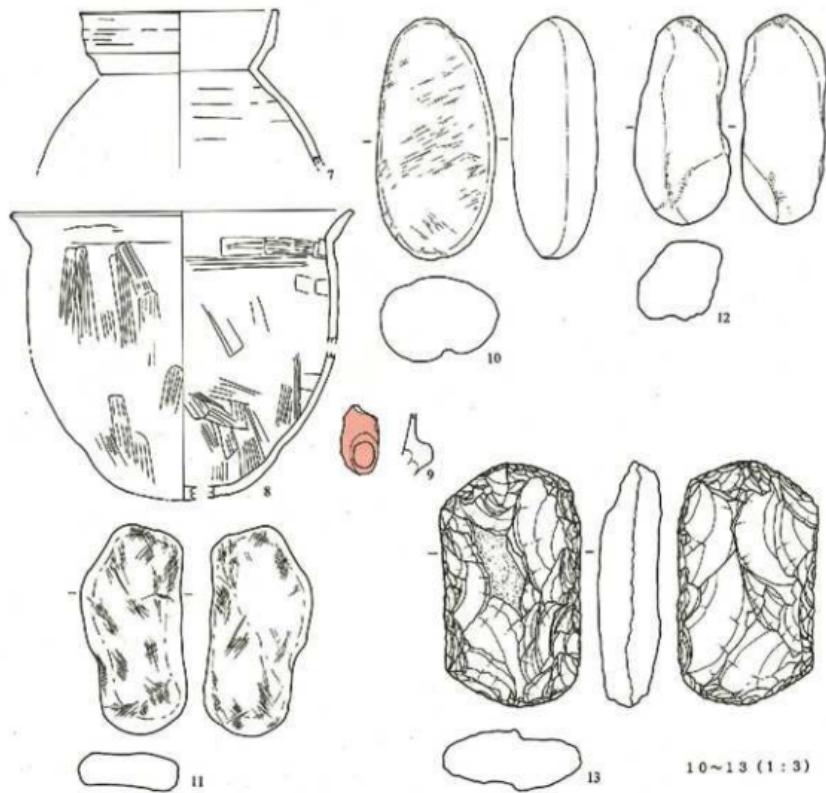
遺構は調査区北端のかー10グリッドに位置し、住居址の半分は調査区外となる。覆土は強粘性の黒褐色土及び床面付近の黒色土である。規模は確認できた最大規模で、東西5.2m、南北3.9m、床面までの深さ15cm内外を測る。平面形は確認状況から方形と考えられる。壁面は地山が強粘性のため固く安定している。床面は踏み固められた状態でピットは床面上から1個、掘方から1個確認できた。カマドは確認できなかった。掘方は中央に比して周囲を深く掘り下げ、強粘性の暗褐色土を埋め込み、上面を床面として利用していた。埋め土の厚さは4~20cmを測る。

遺物は土師器の壺・高壺・壺・壺、擦り石、敲き石、打製石斧が出土した。図示したのは13点である。1~4は壺で1、2は丸底の底部から丸みを持って立ち上がり、口縁部で外反する。外面ヘラ削り後ミガキ、内面ヘラナダ後ミガキを施す。3は平底の底部から丸みを持って立ち上がり口縁部に至る。4は平底気味の底部から丸みを持って立ち上がり口縁部で僅か外反する。5は高壺胸部の破損品である。やや裾広がりで背が低く、外面縦方向のミガキ、内面ヘラナダを施す。6、7は壺で6は小型、7はやや大きく、頸部は「く」の字で外傾し、口辺途中で直上し口縁部に至る。8は広口の壺で丸底の底部からやや丸みを持って立ち上がり、口辺はやや外反する。9は器種不明で外面赤色塗彩を施す。10は安山岩製の擦り石、11は輝石安山岩製で擦り、砥石に利用されている。12はチャート製の敲き石、13は輝石安山岩製の打製石斧である。

本住居址は5世紀後半、古墳時代中期と考えられ、同時期のH 7号住居址よりやや先行する。



第11図 H 3号住居址遺物実測図(1)



第12図 H 3号住居址遺物実測図 (2)

10~13 (1:3)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	壁厚cm	圖 形・文 样		残存率・部位	度 求	色調 (外側) 黒褐色 黒褐色	
						外腹	内腹				
1	土師器	平	11.8	丸底	6.9	口沿破片	外腹へラ底を施ミガキ 内面ミガキ	50	良	褐色 黒褐色 黒褐色	
2	土師器	平	12	丸底	7	口沿破片	外腹へラ底を施ミガキ 内底口沿部、ふちみ複数枚状ミガキ	35	良	褐色 黒褐色	
3	土師器	平	10.5	4	5.1	外底底部へラ削り	内底小片	30	良	褐色 黒褐色	
4	土師器	不	12.9	7.4	7.5	口沿破片	外腹へラ削り	光澤ナデ 内面ヘラナデ	60	良	褐色 黒褐色
5	土師器	高环	—	—	9.9	脚部外周縁ミガキ	脚部焼ナデ 内面ヘラナデ	脚部40	良	褐色 黒褐色	
6	土師器	高	9.5	—	—	口沿破片	外周縁へラ削り	内面ヘラナデ	口縁~脚部断片	褐色	
7	土師器	高	10.2	—	—	口沿破片	外腹へラ削り	内底ヘラナデ	口縁100~ 脚上半周断片	褐色	
8	土師器	高	26.2	丸底	23.7	口沿破片	外腹周縁工刃による削り	内底部目状ナデ	70	良	褐色 黒褐色
9	土師器	不明	—	—	—	外腹部色変影			斑片	良	褐色 黒褐色

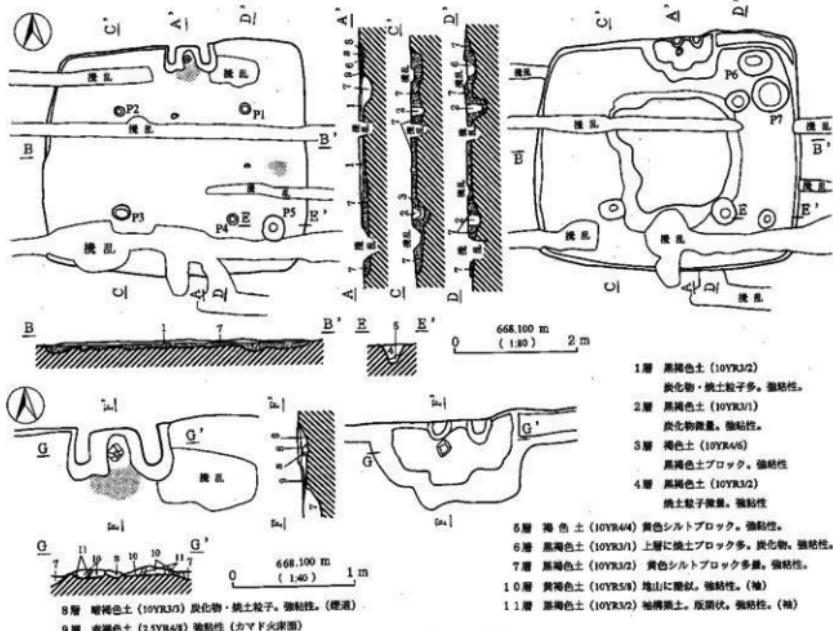
第6表 H 3号住居址遺物観察表

番号	器種	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
10	擦り石	安山岩	14.7	7.4	5.2	610
11	擦り・鍛石	輝石安山岩	12.8	6.6	2.5	330

番号	器種	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
12	磨き石	チャート	12.7	5.9	4.8	515
13	打製石斧	輝石安山岩	14.9	8.5	3.8	660

第7表 H 3号住居址石類観察表

## H 4号住居址



第13図 H 4号住居址実測図

遺構は調査区北のく-14グリッドに位置し、床面は一部床面が露出した状態であった。覆土は炭化物、焼土粒子を含む強粘性的黒褐色土が僅かに堆積していた。規模は東西4.3m、南北3.8m、床面までの深さは最大で5cmを測る。平面形は隅丸方形である。壁は北壁、西壁の一部が僅かに確認できた。床面は東西方向の擾乱によって一部破壊されているが残存部は比較的平坦で固く、調査の結果2面確認でき、第1面上でピットが5個確認できた。このうちP1~4が主柱穴である。第2面上でのピットの位置が同一であることから柱の移動を伴わない改築又は補修が行われたと考えられる。カマドは北壁中央に構築され、北壁から住居内に40cmほどのびる袖及び火床が確認できた。袖は粘土を使用し、火床を挟み込むように構築されていた。火床付近には支脚石と思われる扁平な石が埋め込まれ、その南側に厚さ8cm内外の焼土が認められた。掘方は中央に比して周囲を深く掘り下げ、東壁際にピット2個が確認できた。埋め込まれた土は黄色シルトブロックを多量に含む強粘性的黒褐色土で5~22cmの厚さを持ち、上面を床面として利用していた。

遺物は土師器壊・壺、擦り石が出土した。1は明瞭な縦を有する壊の破片、2は壺の底部破片、3は輝石

安山岩製の擦り石である。

本住居址は出土遺物が僅かなため断定はできないが、古墳時代後期である可能性が考えられる。



第14図 H4号住居址遺物実測図

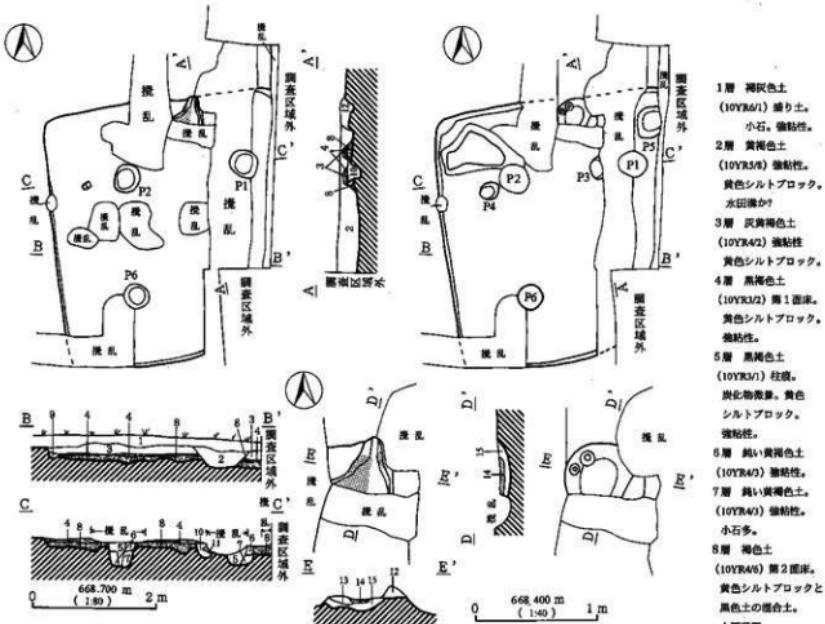
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	高さcm	調査・文様	残存率・部位	地成	色調(外側) (内側)
1	土師鉢	平	[13.5]	丸底	—	口沿横ナメ 外面ヘラケズリ模ナメ	35	良	褐色色 褐色色
2	土師器	壺	—	[13.5]	—	底部ヘラ削り 内面ハナナメ	底部破片	良	褐色色 褐色色

第8表 H4号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
3	擦り石	輝石安山岩	7.3	9.3	2.9	310

第9表 H4号住居址石類観察表

#### H5号住居址



9層 埋褐色土 (10YR3/4) 黒色ブロック。強粘性。

10層 黑褐色土 (10YR3/2) 強粘性。

11層 黑色土 (10YR4/4) 黄色シルト主体。しまり・粘性やや弱い。

12層 赤黄褐色土 (10YR5/2) 砂層と黄色シルトの混合土。強粘性。(地)

13層 黑色土 (10YR4/6) 硫土ブロック・硫化物多量。強粘性。(地)

14層 黑色土 (10YR4/6) 硫土粒子多。上面剥け面。(火床)

15層 深黄褐色土 (10YR4/2) 硫土粒子微量。強粘性。

第15図 H5号住居址実測図

遺構はうー20グリッドに位置し、東側は調査区外となる。なお、本住居址は工事計画の都合上北側は平成9年度、南側は平成11年度に調査を行った。覆土は強粘性の黄色シルトブロックを含む灰黃褐色土である。規模は南北4.3m、東西は確認された最大で3.7m、床面までの深さ8cm内外を測る。平面形は残存状況からやや隅丸の方形と考えられる。確認できた壁は西、南壁の一部と僅かである。床面は擾乱による破壊が著しいが、残存部はほぼ平坦で固く3cm内外の厚みで貼り床されていた。ピットは床面上で3個、掘方で3個確認できP1・2・6が主柱穴と考えられた。カマドは北壁のはば中央と思われる位置に構築されているが、カマド周辺は擾乱が激しく火床の一部を確認するにとどまった。掘方は5~15cmの厚みで黄色シルトブロックと黒色土の混合土である褐色土が埋め込まれ、上面は固く締まっていた。

遺物は土師器の小破片、擦り石、敲き石が出土したが、土器は小破片のみで、図示したのは安山岩製の擦り石2点、輝石安山岩製の敲き石1点である。



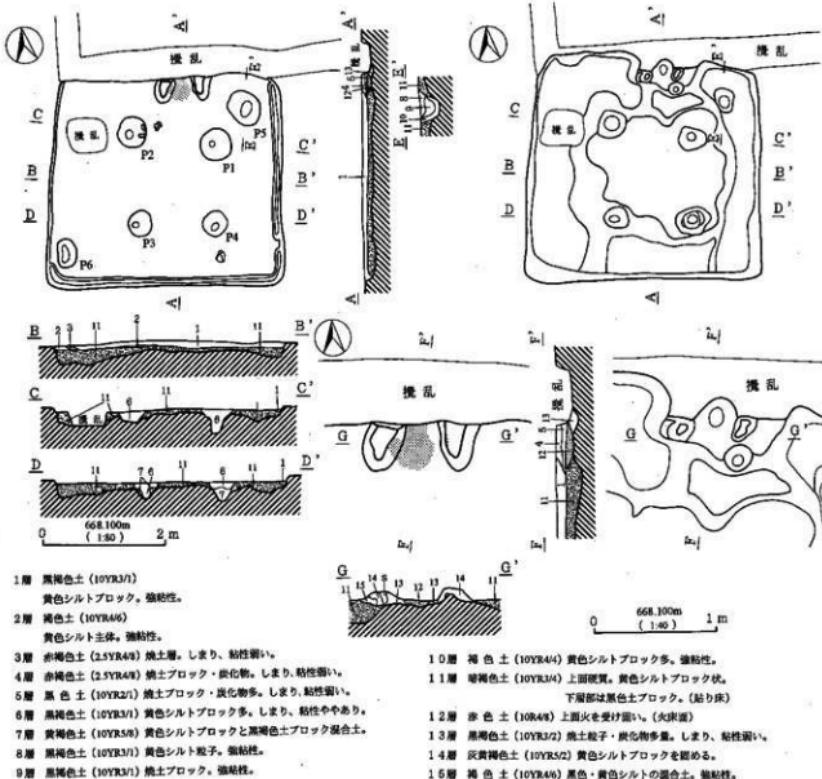
第16図 H 5号住居址遺物実測図

番号	材種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	擦り石	安山岩	9.3	7.3	4.7	380
2	擦り石	安山岩	7.8	6.6	4.5	365
3	敲き石	輝石安山岩	15.3	8.6	7.2	1200

第10表 H 5号住居址遺物観察表

#### H 6号住居址

遺構はけー16グリッドに位置し、北壁付近は擾乱によって破壊されている。覆土は黄色シルトブロックを含む黒褐色土を主とする。規模は東西3.6m、南北は確認された最大で3.4m、床面までの深さは10cm内外を測る。平面形は残存状況からやや隅丸の方形と考えられる。東、南壁際には幅12cm、深さ8cm内外の周溝が認められる。床面はほぼ平坦で全体に固い。ピットは6個確認でき、P1~4が主柱穴と考えられる。カマドは北壁中央付近に構築されているが、北側約半分は擾乱によって破壊されているため確認できたのは両袖先端付近及び火床の一部である。袖は地山の上を利用し、西袖には補強の石材が埋め込まれていた。火床は厚さ6cm内外の焼土が存在し、この上面は固く焼け締まっていた。掘方は中央に比して周囲を深く掘り下げ、5~20cmの厚みで暗褐色土が埋め込まれ、上面を床面として利用していた。



第17図 H 6号住居址実測図

遺物は土師器の鉢・甕、擦り石が出土したが土器は大半が小破片で、図示できたのは2点である。1は体部途中に明瞭な稜を有する鉢で、形状は壺ともとれるがやや深みがあるため鉢とした。2は安山岩製の擦り石である。

本住居址は6世紀代、古墳時代後期と考えられる。



第18図 H 6号住居址遺物実測図

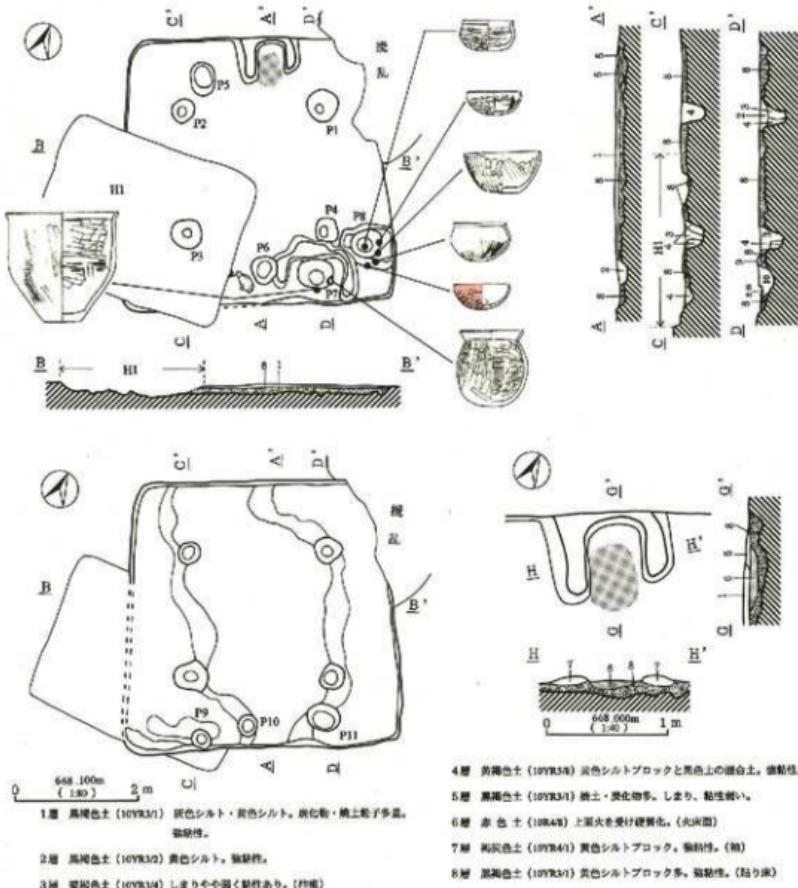
番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	測定者	測定年	地盤	地質
1	土器	鉢	11.6	—	—	山田	1978.10	粘土	粘土層

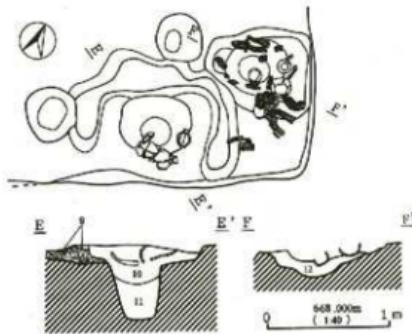
第11表 H 6号住居址遺物観察表

番号	器種	石種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
2	石斧	安山岩	6	5	3.7	100

第12表 H 6号住居址石類観察表

## H 7号住居址



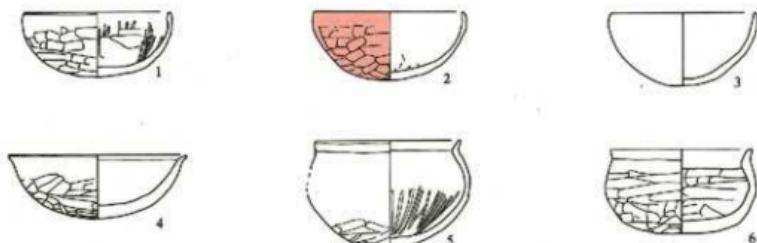


第20図 H-7号住居址実測図(2)

炭化材及び土器が認められ付近には上坑・ピット、窪みが集中することから何らかの作業場であった可能性が考えられる。カマドは北壁のはば中央に構築され、両袖及び火床が確認できた。袖は北壁から火床を挟み込むように50cmほど住居内にのび、火床は厚さ6cm程の焼土が堆積し、上面は固く焼け締まっていた。掘方は中央に比して西、東壁寄りをやや深く掘り下げ、6~10cmの厚みで黄色シルトブロックを多く含む黒褐色土が埋め込まれ、上面を床面として利用していた。

遺物は土器器の壺、鉢、盃、擦り石、白玉、混入として打製石斧が出土した。図示したのは17点である。1~4は壺で丸底の底部から立ち上がり1、2、3はやや内壁気味に口縁部に立ち上がる。2の外面は摩耗が激しいが、赤色塗彩された痕跡が認められる。4は口縁にてやや外反し外面へラ削りを施す。5、6は丸底気味の壺で丸みを持って立ち上がり、口縁端部で僅かに外反する。5は内面放射状のミガキ、外面ハケナデ後ミガキが施され光沢を持つ。6は5に比してやや表面にざらつき感があり外面へラ削り後、部分的にナデを施す。7は広口の鉢で外縁方向の削り、内面へラナデ、底部へラ削りを施す。8は丸底の壺で内外面ともに櫛目状工具による調整痕を持つ。9は広口の壺で外縁目状の調整痕が残る。10は安山岩製の擦り石、11~16は滑石製の白玉である。17は輝石安山岩製の打製石斧である。

本住居址は5世紀後半、古墳時代と考えられ、ほぼ同時期のH-3よりやや時代が下る。



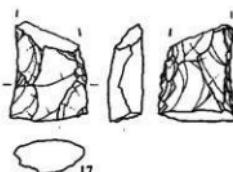
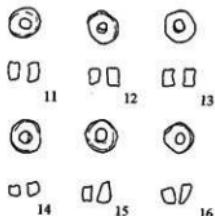
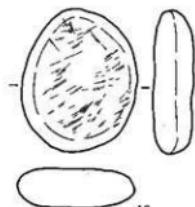
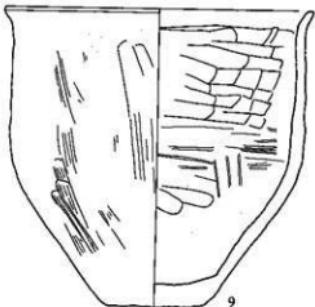
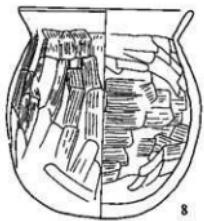
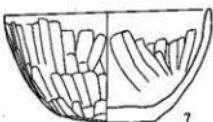
第21図 H-7号住居址遺物実測図(1)

- 9層 黒褐色土(10YR5/6) 黄色ブロック埋りかけ状態。微粘性。
- 10層 黒色土(10YR3/1) 燃土粒子・炭化物多。しまり固く、剛性あり。
- 11層 黒褐色土(10YR5/1) 黄色シルト多。しまり、粘性や柔軟性。
- 12層 黑褐色土(10YR3/2) 黄色シルト・黑色シルト。上層炭化物。燃土粒子。

遺構は調査区北のき-12グリッドに位置し、H-1に切られ、北東コーナー付近は攪乱に破壊されている。規模は東西4.4m、南北4.2m、床面までの深さ5cm内外を測る。平面形はやや隅丸の方形と思われる。床面はほぼ平坦で固い。ピットは床面上で8個確認でき、P1~4が主柱穴、P6は入り口に関係すると思われる。また、南東コーナー付近には多量の

瓦片が散在する。

また、南東コーナー付近には多量の



10・17 (1:3)

第22図 H 7号住居址遺物実測図(2)

番号	器種	断形	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	測量・文様	残存率・部位	焼成	色調(外側) (内側)
1	土師器	环	12	丸底	5.3	口縁横ナデ 外面へラ削り 内面ナデ 放射状ミオキ・やや摩耗	95	良	浅い赤褐色 浅い褐色
2	土師器	环	12.2	丸底	5.5	口縁横ナデ 外面へラ削り 内面横かいナデ・やや摩耗 赤色塗布	85	良	浅赤 浅い褐色
3	土師器	环	11.8	丸底	5.9	口縁横ナデ 内外面塗装のため裏剥落不鮮明	60	良	浅赤 褐色
4	土師器	环	14.5	丸底	5.2	口縁横ナデ 外面へラ削り 内面へラナデ	50	良	浅い赤褐色 浅い褐色
5	土師器	环	11.7	丸底	8.7	口縁横ナデ 外面へラ削り株ナデ 内面放射状ミオキ	85	良	浅赤褐色 浅赤褐色 浅褐色
6	土師器	环	11.5	丸底	6.8	口縁横ナデ 外面へラ削り若に底部付近強い削り 内面へラナデ	100	良	明赤褐色 明赤褐色 明赤褐色
7	土師器	鉢	17	7.8	9.1	口縁横ナデ 外面縁へラ削り 内面斜めへラナデ 底部削り	100	良	浅褐色 浅褐色 浅褐色
8	土師器	甌	14.2	丸底	17.2	口縁横ナデ 外面縁目状削り 内面縁目状横ナデ	70	良	滑色 淡青色 淡青色
9	土師器	甌	25.3	8.1	24.5	口縁横ナデ 外面縁削り工具による擦痕?後ナデ 内面へラナデ	40	良	褐色 褐色 褐色

第13表 H 7号住居址遺物観察表

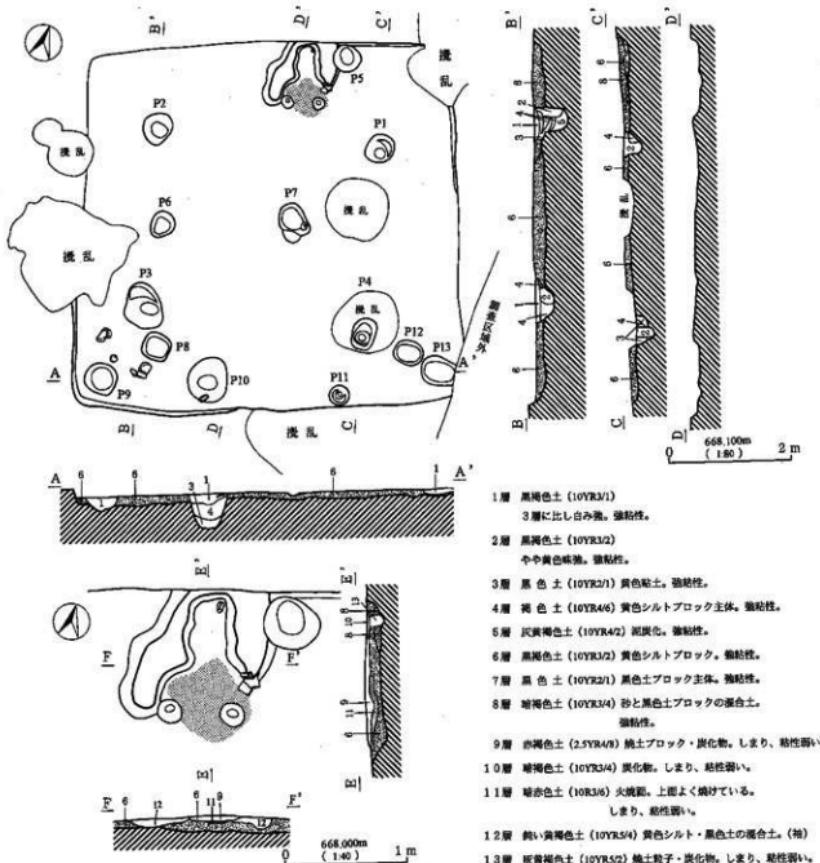
番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
10	拂り石	安山岩	8.7	7.2	2.4	215	17	打製石斧	輝石安山岩	6	4.8	2	72.9

第14表 H 7号住居址石類観察表

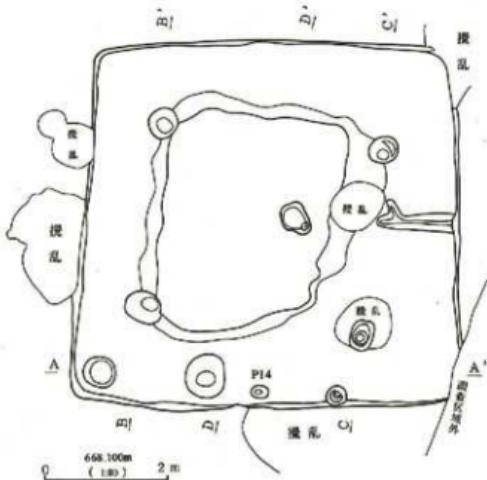
番号	出土位置	種別	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	材質	色調
11	床直	臼玉	4	6	2.5	0.2	滑石	青灰色
12	床直	臼玉	4	6.5	2	0.2	滑石	暗青灰色
13	床直	臼玉	3.5	6.5	2	0.2	滑石	青灰色
14	床直	臼玉	3	6.5	2	0.2	滑石	青灰色
15	Ⅲ区	臼玉	4.5	6	2	0.2	滑石	暗青灰色
16	Ⅲ区	臼玉	4	6	2	0.2	滑石	暗青灰色

第15表 H 7号住居址玉類観察表

## H 8号住居址



第23図 H 8号住居址実測図



第24図 H 8号住居址掘方実測図

焼土化し、上面は固く焼け締まっていた。掘方は中央に比して周囲はやや深く掘り下げられ、8~15cmの厚みで黄褐色シルトブロックを含む黒褐色土が埋め込まれていた。

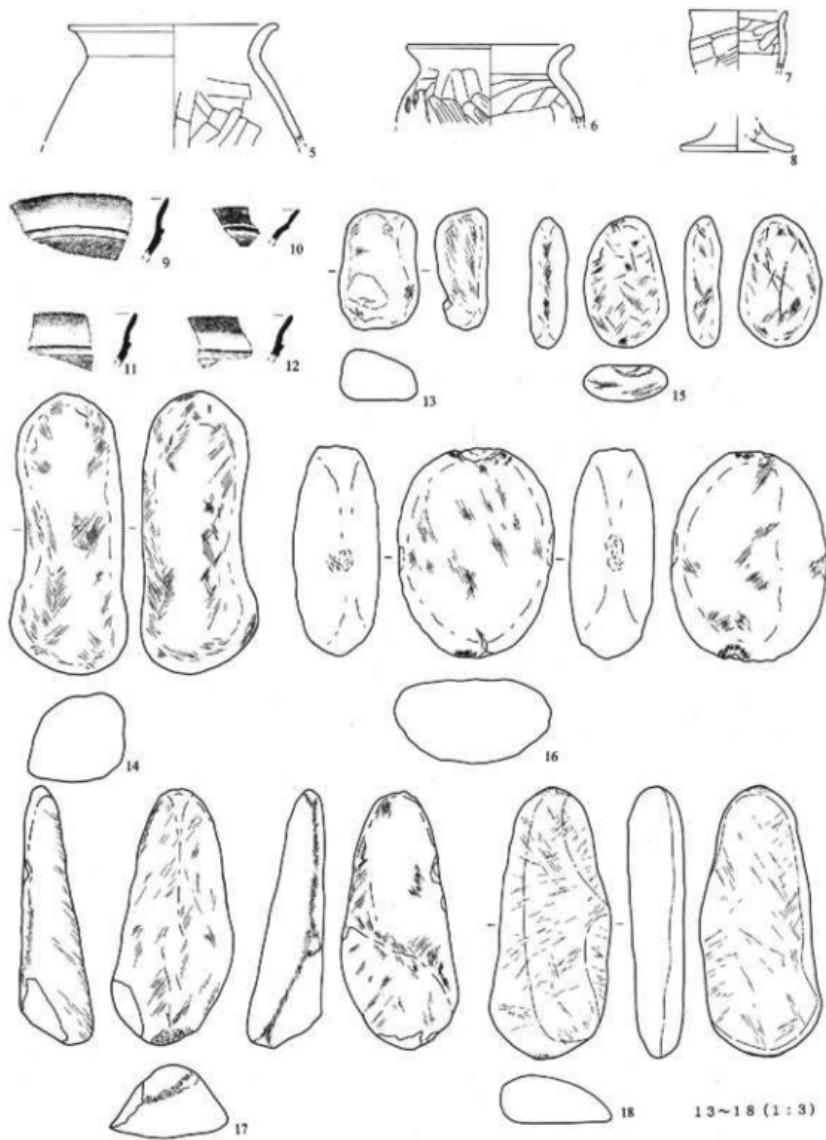
遺物は土器器の壺・鉢・甕・高壺、須恵器、擦り石、砥石、土製円盤などが出土した。図示したのは23点である。1は壺で内外面ともに赤色塗彩を施し口縁は僅かに外反する。2は鉢で削りによってやや平らにされた底部から丸みを持って立ち上がり、内縫気味に口縁に至る。3~6は甕の口縁付近の破片である。7は小型の甕、8は高壺脚部の破片である。9~12は須恵器で9、11、12は高壺の壺部、10は甕の口縁破片で外面に櫛捲波状文を施す。9、11、12は同一個体と思われる。13、14は擦り石、15は安山岩製の砥石、16、17は擦り、敲きに使用され、16は安山岩、17は輝石安山岩製である。18、19は輝石安山岩製で砥石、敲き石として使用され、20は輝石安山岩製で砥石、台石として利用されていた。21、22は黒曜石の剥片、23は土器片を利用したと思われる土製円盤で径2.5cmを測る。

本住居址は5世紀後半、古墳時代中期と考えられる。

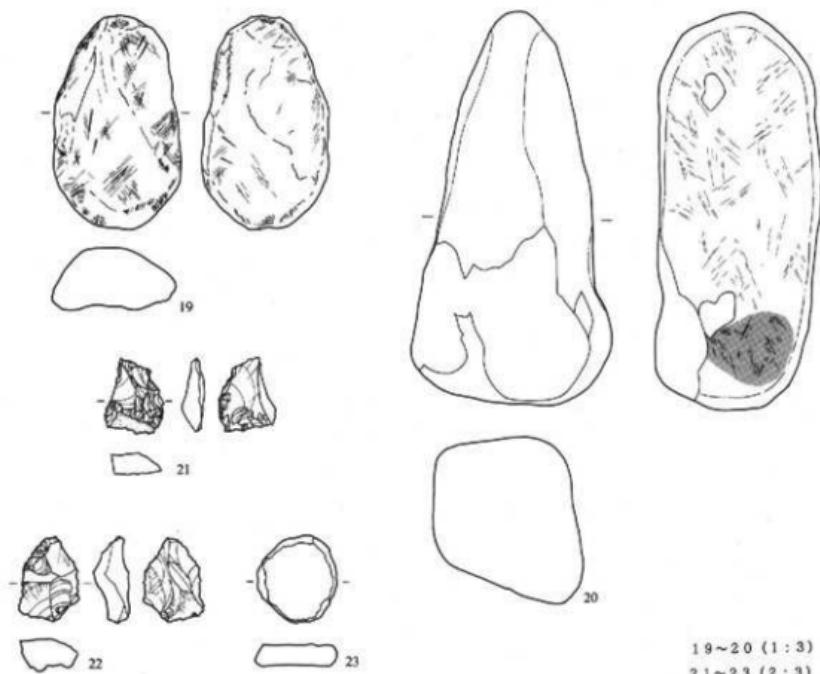


第25図 H 8号住居址遺物実測図（1）

遺構は調査区北の東端え-13グリッドに位置し、僅かに南東コーナーは調査区外となる。覆土は、遺構検出状態で部分的に床面が露出直前という状況であったため不明である。規模は東西6.0m、南北5.9m、床面までの深さは最大標高で10cm内外を測る。平面形はやや隅丸の方形である。壁は北東及び南西コーナー付近のみ確認でき、他は既に検出面と床面がほぼ同じ高さであった。床面はほぼ平坦で特に中央付近が固く締まっていた。ピットは床面上で13個確認でき、P 1~4が主柱穴と考えられた。カマドは北壁中央に構築され、地山の土で作られた袖及び火床が確認できた。袖は北壁から住居内に火床を挟み込むように西袖90cm、東袖70cmほどのび、火床は厚さ5cm内外



第26図 H8号住居址遺物実測図(2)



19~20 (1:3)  
21~23 (2:3)

第27図 H-8号住居址遺物実測図(3)

番号	器種	器形	口径mm	底径mm	器高mm	測定・文様	残存率・剖面	流・底	色調(外側)(内側)
1	土師器	耳	[18]	—	—	H1切妻ナガ 外面刷毛後ナガ 内面ハラナナ 内面赤色朱漆	口縁～多連溝片	良	赤色 黄褐色 黑色 黑色
2	土師器	耳	[14]	[5]	7.8	H1深腹子ナガ 外面刷毛前ナガ・底部ヘラ削り 内面ハラナナ	口縁・底部迷片	良	赤色 黄褐色 黑色 黑色
3	土師器	裏	[12.1]	—	—	H1直底ナナ 外面やや墨脱・模・捺めヘラ削り 内面ハラナナ	口縁・腹上半部	良	黒い褐色 黒い褐色 黒い褐色 黒い褐色
4	土師器	裏	[13.6]	—	—	H1切妻ナナ 外面刷毛ナラ前後ナナ 内面強い捺めヘラナナ	口縁・腹上半部	良	黒い褐色 黒い褐色 黒い褐色 黒い褐色
5	土師器	裏	[17.1]	—	—	H1切妻ナナ 外面刷毛 内面強・捺めヘラナナ	口縁・腹上半部	良	黒い褐色 黒い褐色 黒い褐色 黒い褐色
6	土師器	裏	13.7	—	—	H1切妻ナナ 外面刷毛前工具の痕跡 内面強・捺めヘラナナ	口縁・腹上半部	良	黒い褐色 黒い褐色 黒い褐色 黒い褐色
7	土師器	小型器	[6]	—	—	H1切妻ナナ 外面刷毛状工具による捺め削り 内面ヘラナナ	口縁・腹上半部	良	黒赤褐色 黒褐色 黒赤褐色 黒赤褐色
8	土師器	高环	—	—	9.2	表面刷毛ミギテ 裸部内外刷毛ナナ	脚部裸部被片	良	赤色 黄褐色 黑色 黑色
9	鐵器器	高环	—	—	—	ロクロ頭ナナ 外面黒い擦損斑状紋	H1邊付近被片	良好	赤色 黑色 黑色 黑色
10	鐵器器	環	—	—	—	ロクロ頭ナナ 外面黒い擦損斑状紋	H1邊付近被片	良好	赤色 黑色 黑色 黑色
11	鐵器器	高环	—	—	—	H1切妻ナナ 外面刷毛状工具による捺め削り 内面ハラナナ	口縁付近被片	良好	赤色 黑色 黑色 黑色
12	鐵器器	高环	—	—	—	H1切妻ナナ 外面刷毛状工具による捺め削り 内面ハラナナ	口縁付近被片	良好	赤色 黑色 黑色 黑色

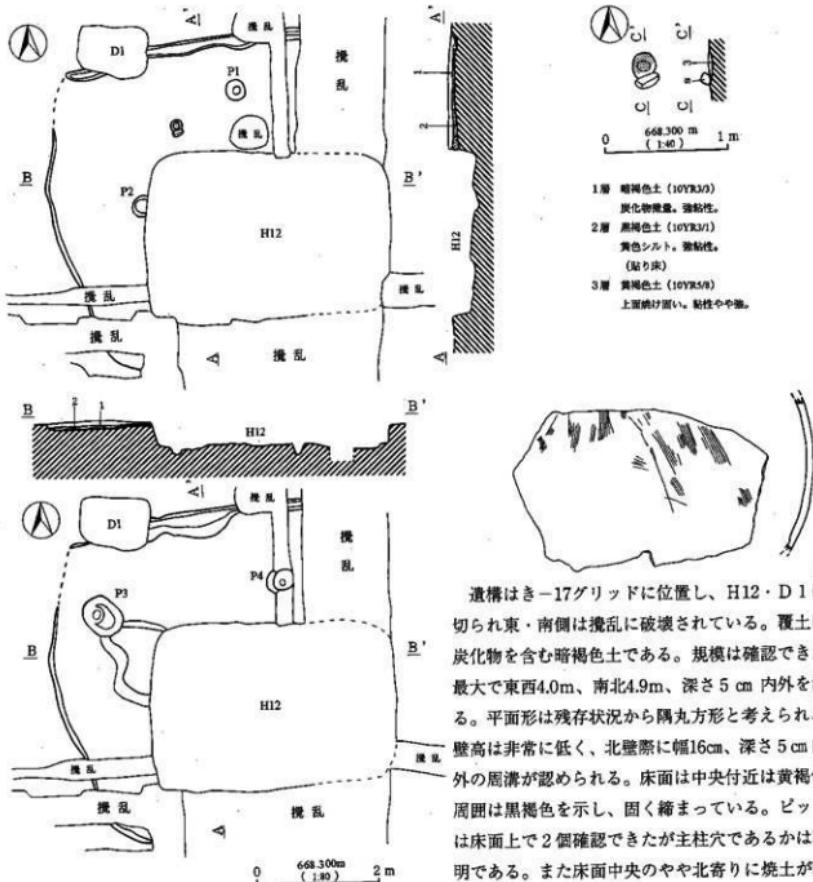
第16表 H-8号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
13	擦り石	ホルンヘルス	7.4	4.9	3.2	175
14	擦り石	輝石安山岩	17.2	7.1	5.6	1005
15	礫石	安山岩	8	5.1	2.3	126.5
16	擦り・磨き石	安山岩	12.8	9.5	5.2	850
17	擦り・磨き石	輝石安山岩	15.7	7.2	4.6	430

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
18	礫石・磨き石	輝石安山岩	16.4	7.4	3.4	600
19	礫石・磨き石	輝石安山岩	13.1	7.8	3.6	520
20	台石・礫石	輝石安山岩	24.2	12.2	10.2	3660
21	鏡片	黒曜石	2.3	1.8	0.7	2.1
22	未製品	黒曜石	2.6	1.9	1	3.5

第17表 H 8号住居址石類観察表

### H 9号住居址



第28図 H 9号住居址・遺物実測図

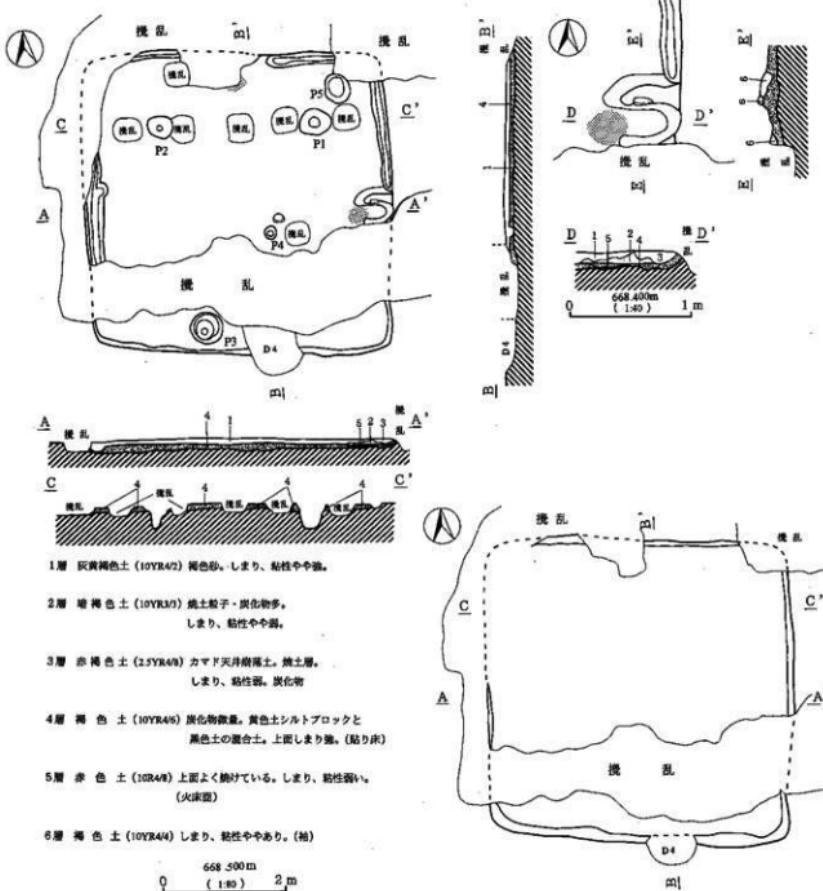
みの南端に長方形の石が置かれていた。掘方は3~12cmの厚みで黄色シルトを含む黒褐色土が埋め込まれ、上面を床面として利用していた。

遺物は土器器の壺腹部と思われる破片が出土した。遺物の出土はこの1点であるため時期の断定はできないが、古墳時代と考えられるH12に切られることから、これよりは僅かに時代が遅ると思われる。

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調査・文書	残存率・部位	焼成	色調(外側) (内側)
1	土器器	壺	—	—	—	外観ハケ目 内面ヘナテア	割部破片	真	明赤褐色 明赤褐色

第18表 H 9号住居址遺物観察表

#### H10号住居址

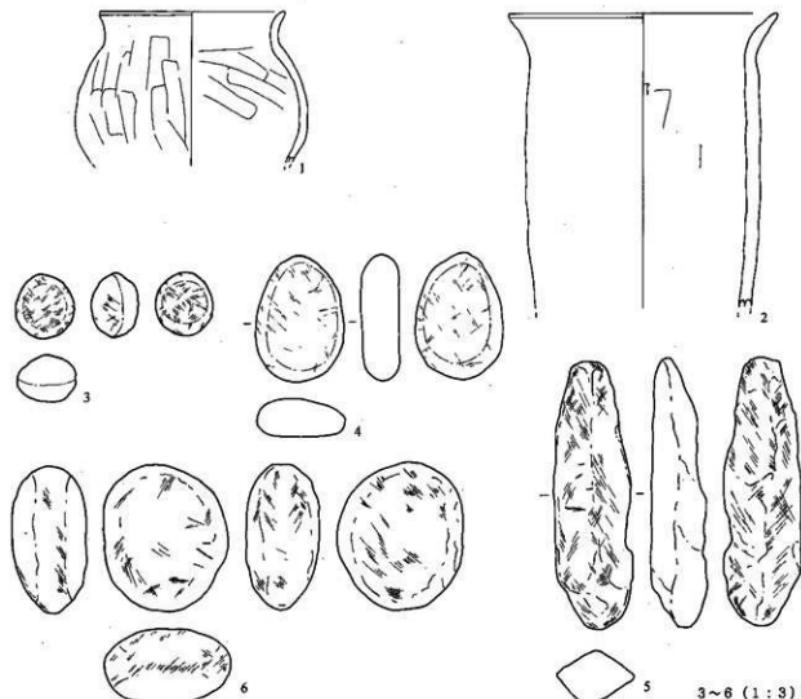


第29図 H10号住居址実測図

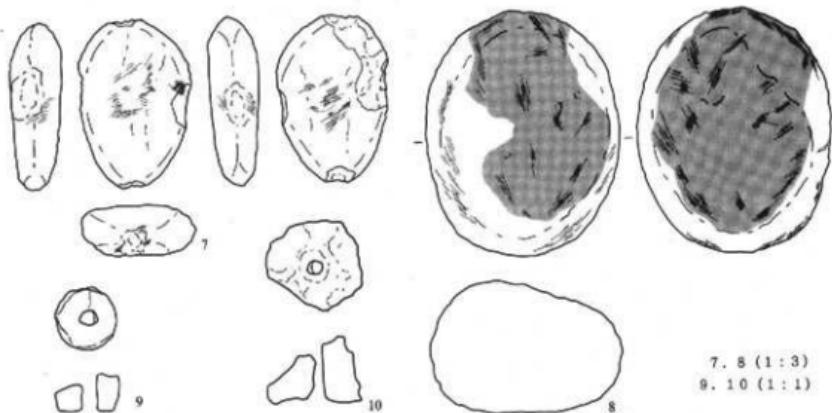
遺構はえー19グリッドに位置し、部分的に大きく擾乱による破壊を受けています。規模は東西4.9m、南北4.8m、床面までの深さ10cm内外を測る。平面形は残存状況から隅丸方形と考えられる。壁高は低く、南壁付近を除き幅12~25cm、深さ8cm内外の周溝が認められる。床面はやや小石が認められるがほぼ平坦で固い。ピットは床面上で4個確認でき、P1、2は北側2本の主柱穴と考えられ、南側2本は確認できなかった。また住居址北側の床面上から僅かだが焼土の堆積が認められた。カマドは東壁のほぼ中央に構築されているが南袖は擾乱に破壊され、北袖及び火床が残存していた。袖は東壁から住居内に60cmほどのび、内壁側に補強と考えられる石材が埋め込まれていた。火床はほぼ円形に厚さ3cm程焼土化し、上面は固く焼け結まっていた。

遺物は土師器壺・壺、擦り石、敲き石、白玉が出土したが土器の大半は壺の小破片である。図示したのは10点である。1はやや胴丸の小型壺である。2は長胴壺で胴下半部は欠損している。最大径は口縁部にあり、残存する胴部はほぼ直線的に立ち上がる。3、4は安山岩製の擦り石、5は輝石安山岩製の擦り石、6は安山岩製の砥石、7は輝石安山岩製の砥石、8は安山岩製の台石である。9、10は滑石製の白玉である。

本住居址は7世紀代、古墳時代後期と考えられる。



第30図 H10号住居址遺物実測図(1)



第31図 H10号住居址遺物実測図(2)

番号	器種	基形	口径(cm)	底径(cm)	基高(cm)	調査・文種	保存率・部位	枚数	色調(外壁)(内壁)
1	土器器	壺	[15]	—	—	口沿變子テ 烧面刷ヘラ削り 内面刷めヘクナテ	口縁～側部破片	丸	褐色～黒褐色
2	土器器	壺	[22]	—	—	口沿變子テ 外面刷ヘラ削り 内面ヘラナテ	口縁～側部破片	丸	褐色～明黄色

第19表 H10号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
3	擦り石	安山岩	3.9	3.6	2.9	33.5	6	砾石	安山岩	8.9	7.7	4.5	400
4	擦り石	安山岩	7.7	5.4	2.3	308.5	7	砾石	麻布安山岩	10.2	6.9	3.1	225
5	擦り石	砾石安山岩	16.3	4.8	3.5	310	8	台石	安山岩	14.9	11.7	8.4	1830

第20表 H10号住居址石類観察表

番号	出土位置	種別	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	材質	色調
9	I区	白玉	7.5	13	4	1.8	青石	明褐色
10	I区	白玉	14	19	3	5.8	青石	明黄色

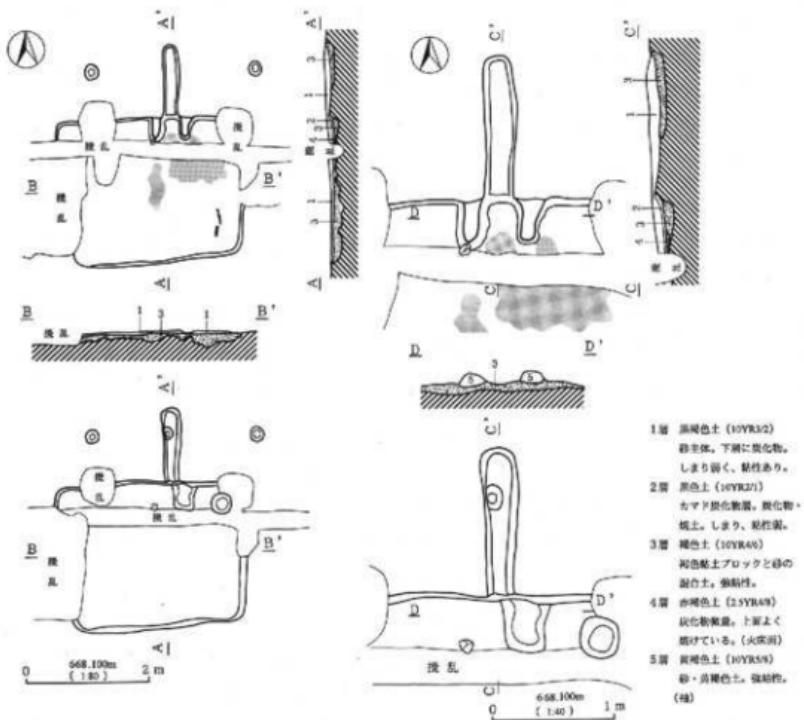
第21表 H10号住居址玉類観察表

### H11号住居址

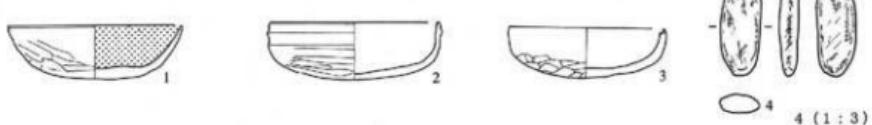
遺構はけー18グリッドに位置し、西及び東壁付近は擾乱に大きく破壊されている。覆土は砂主体で床面焼に炭化物を含む黒褐色土層が存在する。規模は東西2.6m、南北2.3m、床面までの深さ5cm内外を測る。平面形は残存状況からやや東西に長い隅丸長方形と考えられる。床面はほぼ平坦で固く、中央から北東にかけて広く炭化物が認められた。ピットは床面上から確認できなかった。カマドは北壁中央にあり、袖及び火床の一部、煙道が残存していた。袖は住居内に火床を挟み込むように40cmほどのび、地山の上で構築されていた。火床は厚さ3cm程焼土化し、上面は固く焼けしまっていた。掘方は10~20cmの厚みで砂混じりの褐色土が埋め込まれ、上面を床面として利用していた。

遺物は土器器の壺・甕、磨き石が出土したが土器の大半は小破片である。図示したのは4点である。1~3は壺で、1はやや平底気味の底部から直線に近い緩やかな曲線で立ち上がり、内面黒色処理を施す。2は平

らに近い丸底の底部から浅く内壁気味に立ち上がり、体部途中に2本の明瞭な筋を有する。3は丸底の底部から浅く直線的に口縁部に立ち上がる。4は安山岩製の磨き石である。7世紀前半と考えられる。



第32図 H11号住居址実測図



第33図 H11号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	D径cm	底径cm	高さcm	調査文様	残存率・形状	施成	色調(外側) (内側)
1	土器部	环	13.4	丸底込み	4.1	口縁横ナギ 内面ヘラ削り 内面ヘタクナギ 黑色無理	60	良	暗褐色 白色
2	土器部	环	13	丸底	4.4	口縁横ナギ 内外面やや紫紅 外面ヘラ削り後ナギ 内面ヘタクナギ	50	良	灰白色 暗褐色
3	土器部	环	12	丸底	3.8	口縁横ナギ 内面ヘラ削り 内面横ナギ	40	良	褐色 褐色

第22表 H11号住居址遺物観察表

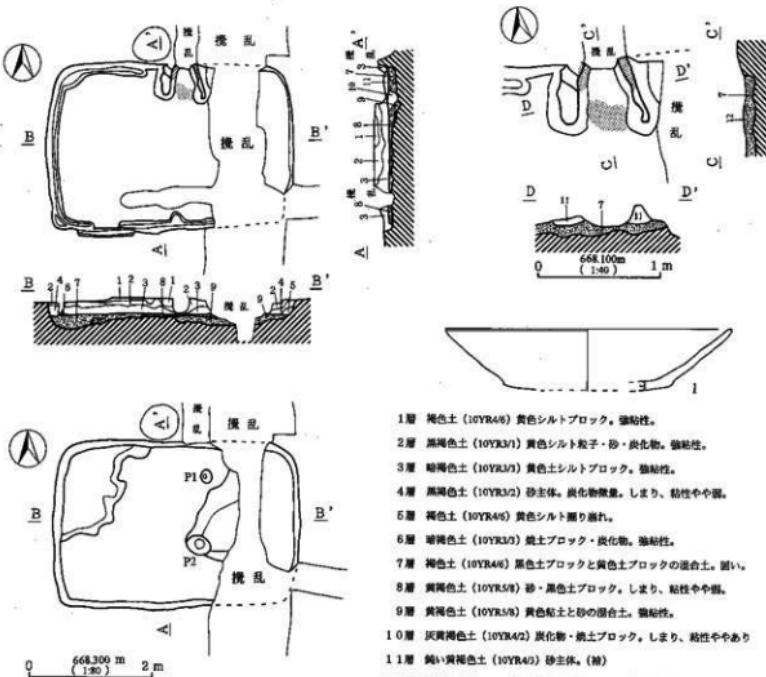
番号	器種	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
4	磨き石	安山岩	5.3	2.3	1.1	21.5

第23表 H11号住居址石類観察表

### H12号住居址

遺構はき-17グリッドに位置し、H 9を切る。住居址東側は搅乱に大きく破壊されている。覆土は黄色シルトブロックを含む褐色土、黒褐色土、暗褐色土である。規模は東西3.9m、南北2.7m、深さ30cm 内外を測る。平面形はやや東西に長い隅丸長方形である。壁面は固く安定し、西壁を除き幅15cm内外、深さ10cm 内外の周溝が認められる。床面はほぼ平坦で固い。ピットは床面上には存在しなかった。カマドは北壁中央に構築されているが、煙道部分は南北方向にのびる搅乱に破壊され、袖及び火床が残存していた。袖は北壁から火床を挟み込むように住居内に50cmほどのび、内壁は火を受け固く焼け締まっていた。火床には厚さ4cmほどの焼土が存在した。掘方は5~12cmの厚みで強粘性の黄褐色土が埋め込まれ、この上面を床面として利用していた。

遺物は土師器の壺、甕が出土したが大半は小破片である。図示したのは壺1点である。本住居址は遺物の形状、その他の破片から古墳時代と考えられる。

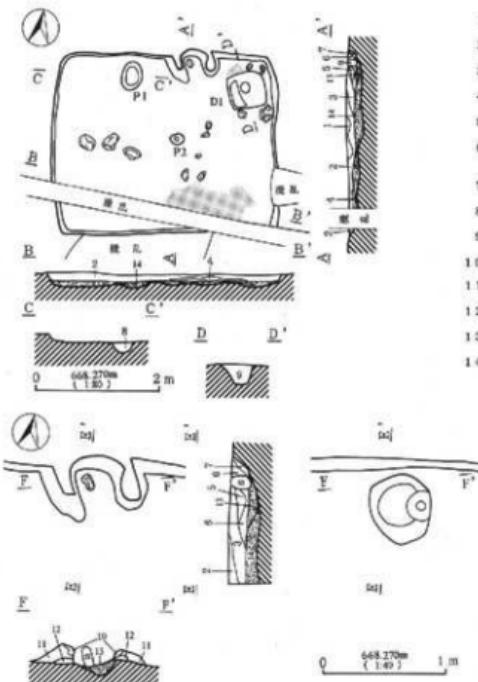


第34図 H12号住居址・遺物実測図

番号	基 横	基 形	口幅cm	底径cm	器高cm	調 整・文 種	残存率・部位	焼 成	色調 (外側)
1	土師器	平	[23.6]	—	—	内面ハラモモ 両端多孔 内面ハラナマ	口縁一部破片	且	茶色 白色

第24表 H12号住居址遺物観察表

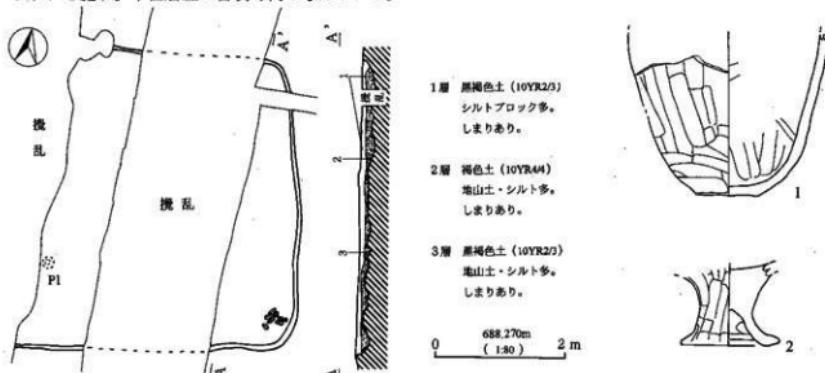
## H13号住居址



### H14号住居址

遺構はかー25グリッドに位置し、遺構の多くが擾乱に破壊されている。覆土は黄色シルトを多く含む黒褐色土である。規模は残存部の最大で東西4.0m、南北は4.3m、床面までの深さ10cm 内外を測る。平面形は残存状況から隅丸方形と考えられる。床面はほぼ平坦で固く、南東コーナー付近に礫物石と思われる石が集石となっていた。ピット、カマドは認められなかった。掘方は全体に凹凸があり、厚さ5~15cmで地山の黄色シルトを主体とする褐色土が埋め込まれ、この上面を床面として利用していた。

遺物は土師器の壺・高坏が出土した。図示したのは2点である。1は壺の底部から胴部にかけての破損品で外面縦方向のヘラ削り、内面ヘラナデを施す。2は脚部の短い高坏脚部で外面縦方向のヘラ削り、内面ヘラナデを施す。本住居址は古墳時代と考えられる。



第36図 H14号住居址・遺物実測図

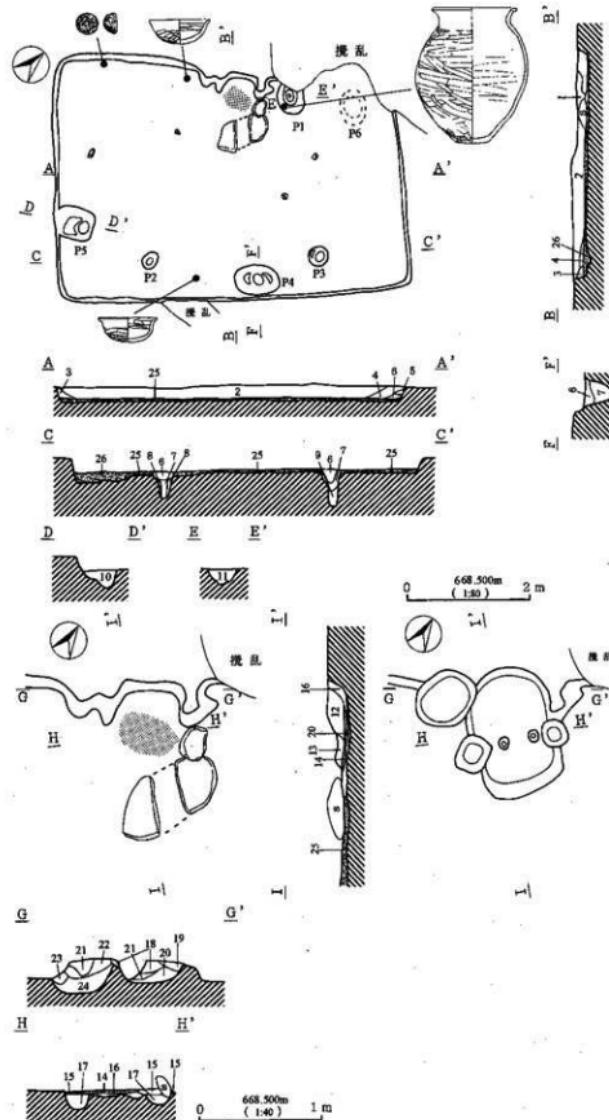
番号	部 種	形 形	LJ径cm	底径cm	器高cm	調査・文 様	残存率・部位	焼 成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	壺	—	5.2	—	外面縦、底部周辺斜めヘラ削り 内面ヘラナデ	底部～胴部破片	良	黄褐色 赤褐色 灰褐色 灰黑色
2	土師器	高坏	—	7.7	—	脚部外周縦ヘラ削り 脚部横ナデ 内面ヘラナデ	脚部のみ	良	黄褐色 赤褐色 灰褐色 灰黑色

第26表 H14号住居址遺物観察表

### H15号住居址

遺構はおー29グリッドに位置し北東コーナー付近は擾乱に破壊されている。覆土はシルト質の暗褐色土を主体とする。規模は東西5.8m、南北4.1m、床面までの深さ25cmを測る。平面形は隅丸長方形である。壁はほぼ直上直下で安定している。床面はほぼ平坦で固く、ピット5個が確認できた。このうちP2、3は主柱穴、P4は入り口部のピットと考えられる。カマドは北壁中央にあり、袖の一部及び火床が残存していた。袖は強粘性の地山土でつくられ、北壁から住居址内に30cmほどのびていた。火床には厚さ5cmほどの焼土が存在した。カマド前には火を受けもろくなつた長方形の石が横たわっていた。カマドの焚き口部の天井石であった可能性が考えられる。また、カマド西側には径50cm、深さ30cmの土坑が存在し、土師器の壺が数個体出土した。掘方は地山のシルトを主体とする黄褐色土が薄く埋め込まれ上面を床として利用していた。

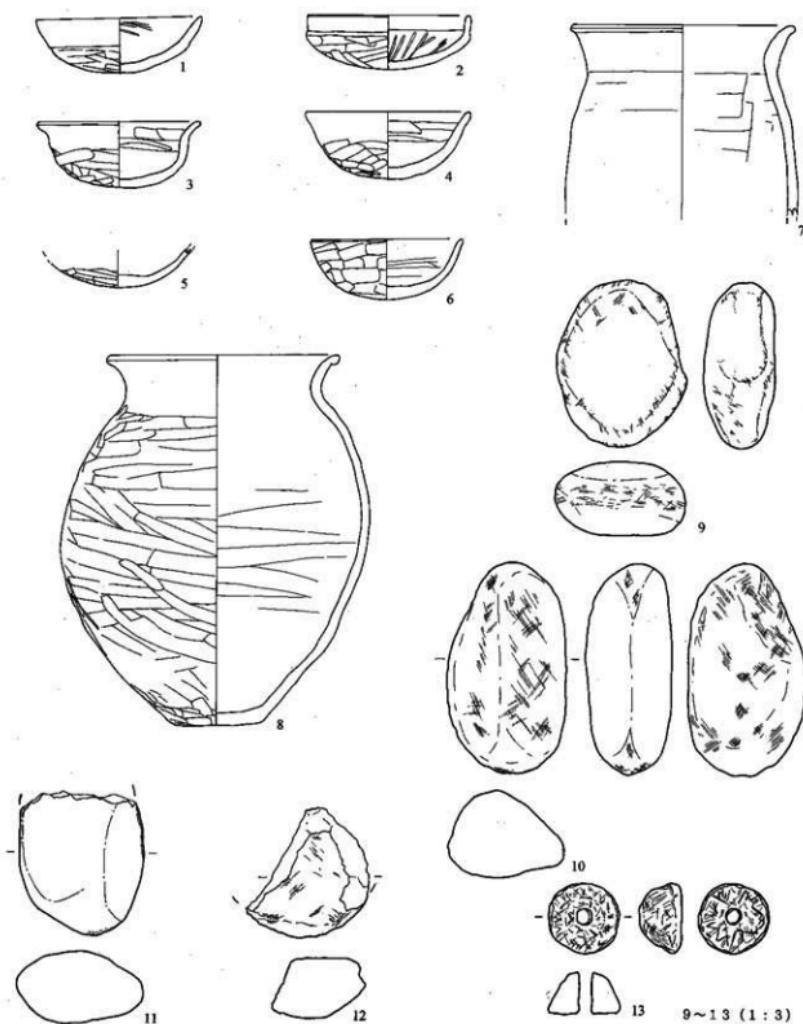
遺物は土師器の壺・壺、擦り石、敲き石、台石、紡錘車が出土した。図示したのは13点である。1~6は丸底の壺である。1、2は明瞭な稜を有し、1は稜から開き気味に、2は短く直上し口縁に至る。3、4はヘルメット型で口縁間近で外反する。5、6は丸底の底部から丸みを持って立ち上がる。7は長胴壺の口縁



第37図 H15号住居址実測図

から胴上半部にかけての破片である。8は胴丸の壺である。9、10は輝石安山岩製の擦り石、12は輝石安山岩製の台石、13は滑石製の鋸鉋車である。

本住居址は6世紀前半、古墳時代後期と考えられる。



第38図 H15号住居址遺物実測図

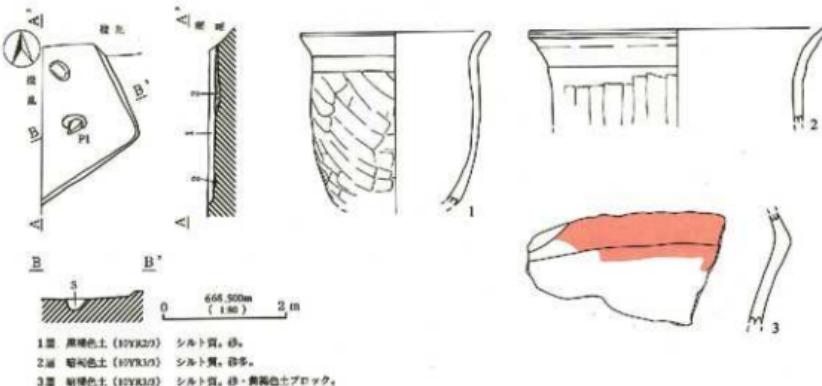
番号	器種	器形	口径(cm)	底深(cm)	基高(cm)	調査・文様	残存率・認定	造形	色調(外側) (内側)
1	土師器	壺	13.6	丸底	4.5	口沿横ナメ 外面ヘラ削り 内面茎丸、ややナメ無	70	良	灰褐色 灰褐色
2	土師器	壺	13.2	丸底	4.5	口沿横ナメ 外面ヘラ削り 内面致密板ミガキ	70	良	灰褐色 灰褐色
3	土師器	壺	13.3	丸底	5.4	口沿横ナメ 外面ヘラ削り 丸底ヘラナマ	100	良	灰褐色 灰褐色
4	土師器	壺	13.6	丸底	5.5	口沿横ナメ 外面ヘラ削り 内面ヘラナマ	100	良	灰褐色 灰褐色
5	土師器	壺	-	丸底	-	口沿横ナメ 外面ヘラ削り 内面ヘラナマ	40	良	灰褐色 灰褐色
6	土師器	壺	12.6	丸底	4.9	外面ヘラ削り 内面ヘラナマ	60	良	灰褐色 灰褐色
7	土師器	壺	[18.5]	-	-	口沿横ナメ 外面やや茎丸、肩ヘラ削り 内面横ヘラナマ	口縁へ剥離薄片	良	灰褐色 灰褐色
8	土師器	壺	19.1	7.6	30.5	口沿横ナメ 外面ヘラ削り底ナマ 外面ヘラナマ	85	良	灰褐色 灰褐色

第27表 H15号住居址遺物観察表

番号	器種	石種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	番号	器種	石種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
9	拂き石	輝石安山岩	30.1	8	4.4	406	12	台石	輝石安山岩	7.9	7.7	4.2	238
10	拂き石	輝石安山岩	22.9	7.1	5.3	606	番号	器種	石種	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)
11	刷き石	輝石安山岩	8.7	7.7	4.4	430	13	粘土車	泥石	最大4.4	2.6	0.75	64

第28表 H15号住居址石類観察表

H16号住居址



第39図 H16号住居址・遺物実測図

遺構はかー29グリッドに位置し、大半が擾乱による破壊を受け、南東コーナー付近が僅かに残存していた。確認できた規模は南壁1.9m、東壁1.4m、床面までの深さ13cm 内外である。床面上ではピットは1個確認できた。炉などの施設は存在しなかった。掘方はシルト、砂を含む暗褐色土が埋め込まれ上面を床面として利用していた。

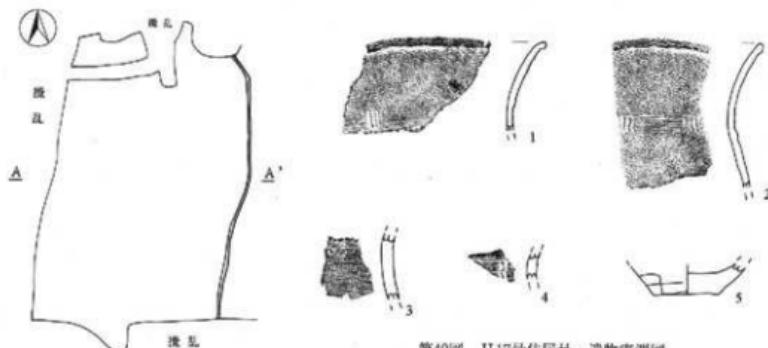
遺物は床面近くから弥生式土器、土師器が出土した。1は土師器の蓋で底部は欠損している。外面斜め方向のヘラ削りを施す。2は土師器壺の口縁である。3は弥生式土器で外面赤色塗彩された壺の体部破片と思われる。本住居址からは弥生式土器、土師器の時期の異なる遺物が出土し、炉またはカマドの確認もできな

かったことから時期の確定ができないかった。

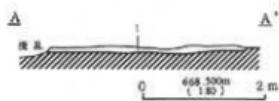
番号	部 種	器 形	口径cm	底径cm	器高cm	調 査・文 様	残存率・部位	状 態	色調 (外側) (内側)
1	土器部	壺	15.1	—	—	口沿横ナデ 外面縦目ヘラ削り 内面ヘラナナ	30	良	黒い褐色 黒い褐色
2	土器部	壺	[24.2]	—	—	口沿横ナデ 外面縦目ヘラ削り 内面ヘラナナ	口縫破片	良	黒い褐色 黒い褐色
3	弥生式土器	壺	—	—	—	外面赤色彫影	瓶底破片	良	赤色 黒い褐色

第29表 H16号住居址遺物観察表

### H17号住居址



第40図 H17号住居址・遺物実測図



1層 黒褐色土 (INV20) シルト質、沙・炭化物。

遺構はこ-29グリッドに位置する。周辺は擾乱によって大半が破壊され、東側において僅かな掘方と思われる掘り込みが認められた。

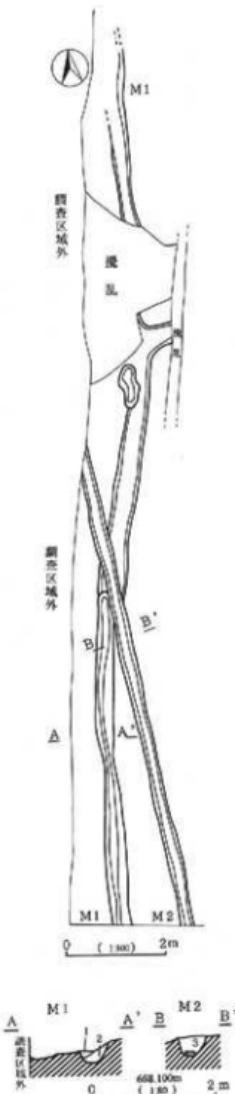
遺物は弥生式土器片が出土した。1、2は壺の口縁破片で口縁、体部外面に撚波波状文、頸部縦状文、内面ハケナナ後横方向の磨きを施し、口縁は二重口縁である。3は器種不明の破片で横方向の条線を施す。4は壺の頸部破片と思われ外縁波状文、赤色朱彩を施す。5は壺または壺の底部である。

本遺構は一部に浅い掘り込みが認められる程度で、住居址とは断定できないが、周辺から弥生式土器が出土することから、弥生時代の遺構である可能性は推察できる。

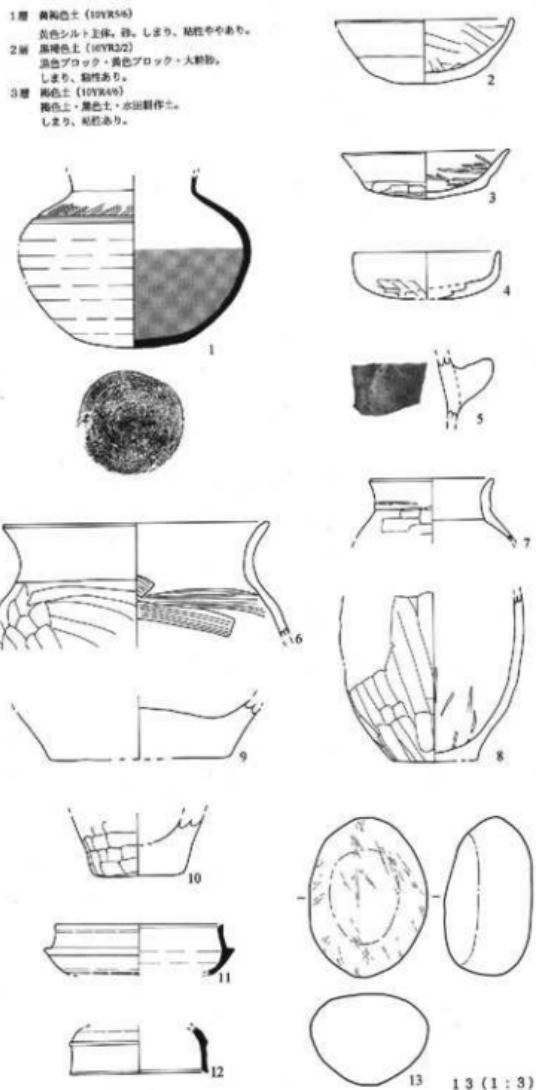
番号	部 種	器 形	口径cm	底径cm	器高cm	調 査・文 様	残存率・部位	状 態	色調 (外側) (内側)
1	弥生式土器	壺	—	—	—	口沿横面撚波波状文 直部縦状文 2と同一個体の可能性あり	口縫破片	良	黒毛褐色 黒毛褐色
2	弥生式土器	壺	—	—	—	口縁-直部外縁撚波波状文 縦部縦状文 1と同一の可能性あり	口縫破片	良	黒毛褐色 黒毛褐色
3	弥生式土器	—	—	—	—	外縁横波状文	瓶底破片	良	黒い褐色 黒い褐色
4	弥生式土器	壺	—	—	—	直部縦状文 外縁赤色朱彩	瓶底破片	良	赤色 黒毛褐色
5	弥生式土器	—	—	5.2	—	外縁ヘラ削り 内縁ヘラナナ	瓶底破片	良	黒い褐色 黒い褐色

第30表 H17号住居址遺物観察表

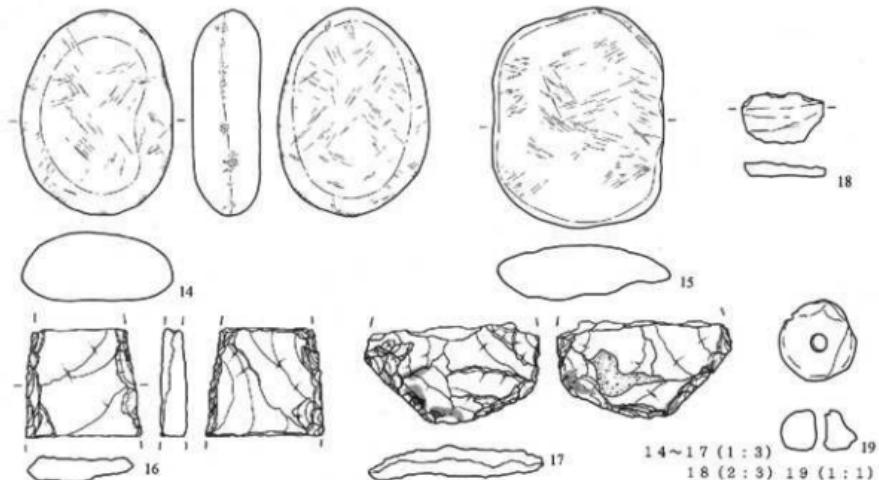
## 第2節 溝状遺構



第41図 M1・M2号溝状遺構実測図



第42図 M1号溝状遺構遺物実測図(1)



第43図 M1号溝状遺構物実測図(2)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	測定式	測定式	底面・頂面	底・或	色調(外側)(内側)
1	底部器	盤	—	8.3	—	ヨクロ横ナギ	河原底盤2本・薪の先端 奥部・底場外側回転へラ削り 内面自然端付	66	良好	灰白色 黄灰色
2	土器器	坪	[14.5]	大底	5.2	口沿横ナギ	外周底延や削り回転 内底へラナギ	70	良	灰白色 灰白色
3	土器器	坪	[13.8]	大底	—	口沿横ナギ	外底へラ削り 内底摩耗一底1ガニ痕残	53	良	灰褐色 灰褐色
4	土器器	坪	[12]	A底	—	口沿横ナギ	外周へラ削り	20	良	灰褐色 灰褐色
5	土器器	—	—	—	—	とどけ張り付け	—	破片	良	灰褐色 灰褐色
6	土器器	盤	[21.7]	—	—	口沿横ナギ	外周横・薪めへラ削り 内底横目状工具ナギ	口縁～網状破片	良	灰褐色 灰褐色
7	土器器	盤	[16.3]	—	—	口沿横ナギ	外周横へラ削り	口縁・網状破片	良	灰褐色 灰褐色
8	土器器	盤	—	7	—	外周削・底部へラ削り、底周間凹凸に張り、内面へラ削り	底部～網状	良	灰褐色 灰褐色	
9	土器器	盤	—	14.6	—	土器表面摩擦	調整痕不分明	底部	良	浅褐色 灰白色
10	土器器	盤	—	6.5	—	外周・底部へラ削り	内底へラナギ	底部～網状	良	灰褐色 灰褐色
11	頭部器	坪	[12.8]	—	—	ヨクロ横ナギ	—	受鉗破片	良好	灰白色 灰白色
12	頭部器	ふた	[11.3]	—	—	ヨクロ横ナギ	—	口縁破片	良好	灰白色 灰白色

第31表 M1号溝状遺構物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
13	擦り石	輝石安山岩	9.7	7.5	5.4	540	16	打製石斧	輝石安山岩	6.2	6.7	1.5	96
14	擦り・削き石	輝石安山岩	11.9	9.8	3.8	560	17	打製石斧	輝石安山岩	5.7	10	1.7	136
15	擦り・削き石	輝石安山岩	12.7	10	3	520	18	底片	千枚岩	1.4	2.4	0.4	2

第32表 M1号溝状遺構石類観察表

番号	出土位置	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	色調
19	I区	臼玉	7.5	—	3.5	25	滑石	浅黄色

第33表 M1号溝状遺構正類観察表



第44図 M2号溝状遺構物実測図

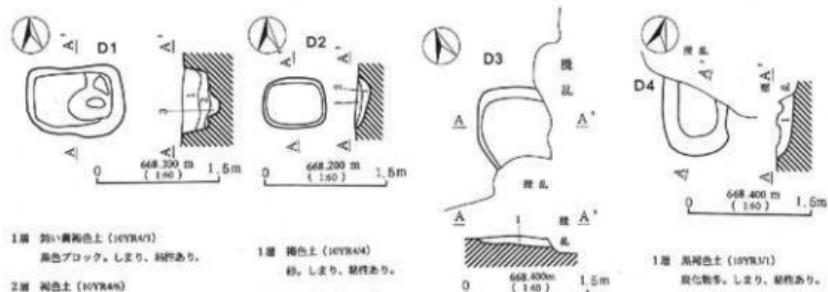
番号	基 標	基 形	口幅(m)	底面(m)	高さ(cm)	著 症・文 標	残存率・部位	成 分	色調(外側)(内面)
1	土層器	矩	[14]	丸形	4	口延長ナメ 外面ヘラ削り 内面みこみ延放状ナメナ	40	良	暗灰色 淡黄色
2	土壤器	菱	—	7.2	—	外壁ヘラ削り 丸部木製痕 内面ヘラ削り	泥質軟土	良	暗灰色 褐色
3	土層器	菱	—	5.5	—	外壁・底部ヘラ削り 内面ヘラ削り	丸部・体部断片	良	暗灰色 褐色

第34表 M2号溝状遺構物観察表

番号	基 標	石 材	長さ(cm)	幅 (m)	厚さ(cm)	重さ(g)
4	不明	硬質砂岩	3.3	1.9	0.8	52

第35表 M2号溝状遺構石類観察表

### 第3節 土坑



1層 黒い褐色土 (16YR4/1)

黑色ブロック。しまり、粘性あり。

1層 褐色土 (10YR4/4)

紺。しまり、粘性あり。

2層 褐色土 (10YR4/6)

黄色シルト。さらさら。しまり、粘性あり。  
砂質。さらさら。

3層 褐色土 (10YR4/4)

黑色砂。しまり、粘性あり。

1層 黑褐色土 (10YR3/1)

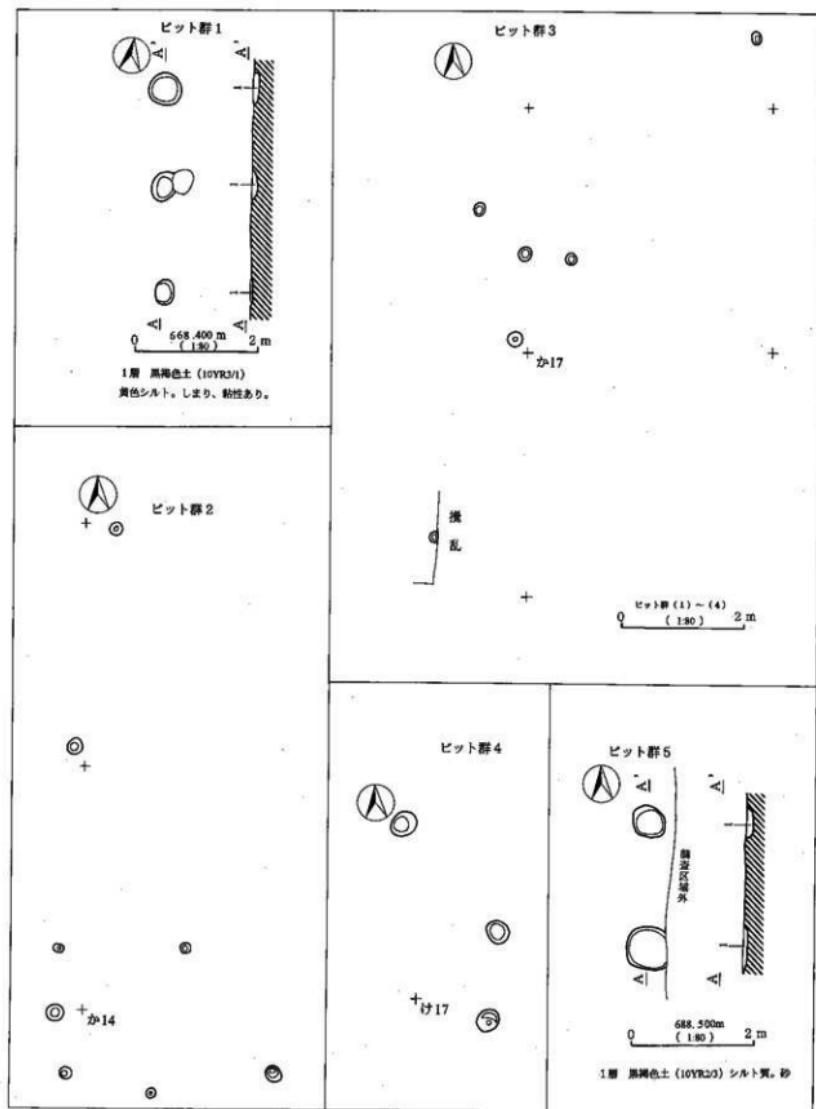
腐化物多。しまり、粘性あり。

第45図 土坑実測図

直標名	位置	平面形	東西(m)	南北(m)	深さ(cm)	出土遺物	直標走査
D 1	S-17	長方形	120	78	48	—	H 9
D 2	S-17	方形	28	65	18	—	
D 3	S-18	【方形】	[80]	[80]	13	—	東・南風
D 4	S-20	【長方形】	82	[84]	18	—	北風。H10

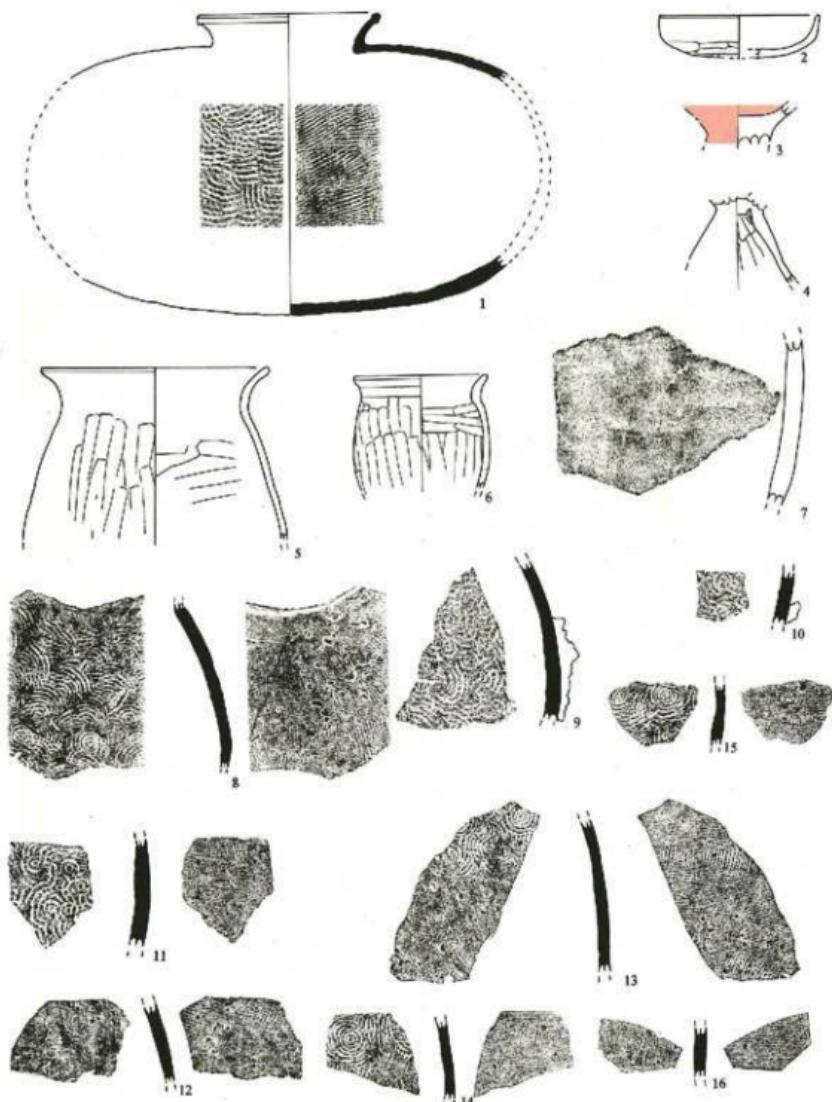
第36表 土坑観察表

#### 第4節 ピット群

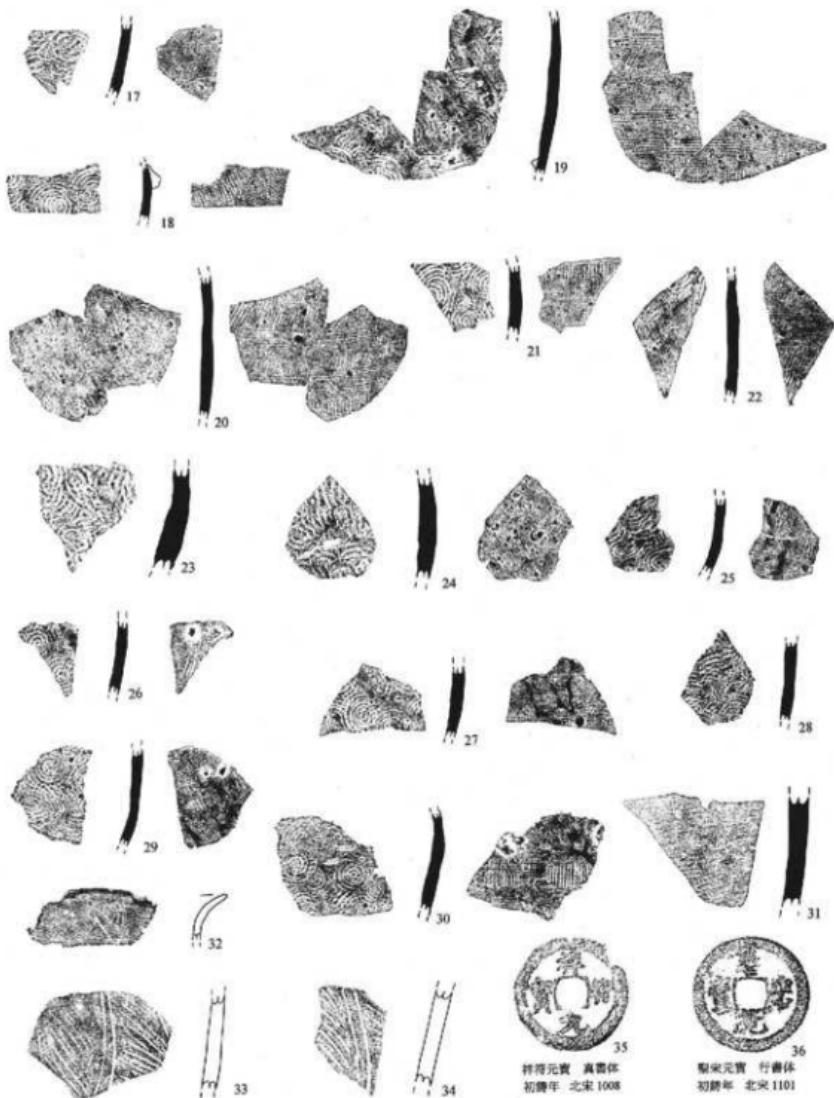


第46図 ピット群実測図

第5節 遺構外遺物

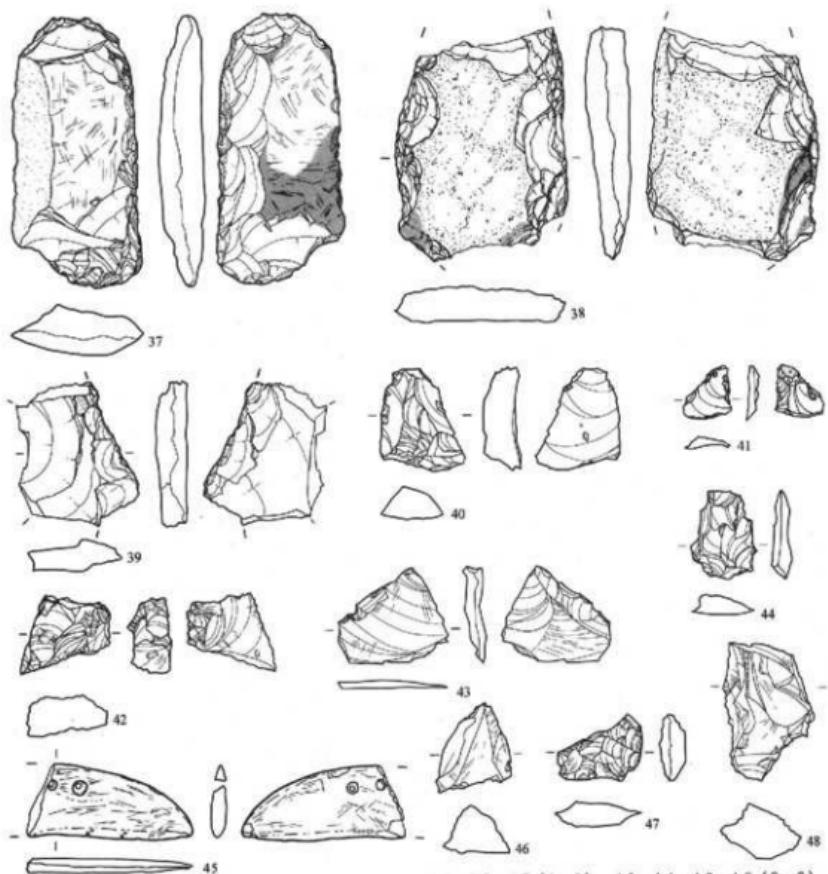


第47圖 遺構外遺物實測圖（1）



第48図 遺構外遺物実測図（2）

35, 36 (1:1)



第49図 遺構外遺物実測図(3)  
37~39, 45 (1:3) 40~44, 46~48 (2:3)

番号	基 標	器 形	口径cm	直径cm	厚さcm	調 整・文 样	残存率・部位	組 成	色 調 (外觀)(内觀)
1	石刀器	集散	[15.2]	—	—	口カ口崩ナダ 口縫側リ付け 外縫自然崩材	50	良好	黑色 黑色 黑色 黑色
2	土器器	片	[13.4]	—	—	口沿崩ナダ 外縫ヘク崩り	20	良	黑色 黑色 黑色 黑色
3	丸生式土器	薄片	—	—	—	内外縫赤色染影	环縫合部破片	良	赤色 赤色 赤色 赤色
4	土器器	高片	—	—	—	薄片外縫崩ヘク崩り 内面ヘクナダ	薄部破片	且	黑色 黑色 黑色 黑色
5	土器器	裏	[10.7]	—	—	口沿崩ナダ 外縫崩ヘク崩り 内面崩ヘクナダ	口縫-折縫破片	良	黑色 黑色 黑色 黑色
6	土器器	裏	[11]	—	—	口沿崩ナダ 外縫崩ヘク崩り 内面崩-紅ヘクナダ	口縫-根部破片	且	黑色 黑色 黑色 黑色

第37表 遺構外遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
37	打製石斧	輝石安山岩	16.4	7.9	3.1	430
38	打製石斧	輝石安山岩	14.2	10.6	2.8	530
39	打製石斧	輝石安山岩	9.6	7.45	1.9	138
40	剥片	黒曜石	3.1	2.7	1.1	6.7
41	剥片	黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.5
42	石核	黒曜石	2.4	2.7	1.4	7.7

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
43	剥片	黒曜石	3	3.35	0.7	3.6
44	剥片	黒曜石	2.7	2	0.6	2.1
45	石核	輝灰岩	4.6	10	1	49.5
46	石核	黒曜石	2.8	2.5	1.4	7.1
47	剥片	黒曜石	2	2.6	0.8	2.9
48	石核	黒曜石	4.7	2.8	1.5	15.2

第38表 遺構外石類観察表

## ま と め

本遺跡は佐久市内を二分する千曲川左岸に広がる標高668m内外の氾濫源沖積地に所在し、千曲川との比高差は10m内外を測る。遺跡の周辺では近年発掘調査の件数も増し、中道遺跡北東方向に位置する寺添遺跡、市道遺跡、宮添遺跡等の調査が行われ、古墳時代から平安時代の遺構が確認されている。

今回、中道遺跡Ⅱの調査が行われ、弥生時代から古墳時代後期の遺構及び縄文時代から古墳時代後期の遺物が確認できた。竪穴住居址は弥生時代1軒、古墳時代10軒、古墳時代以降4軒、時期の確定ができないものの2軒という調査結果であった。遺構の分布は開発地域の北東付近に集中し、片貝川が流れる西及び南の地域からは認めることができなかった。また、近年の発掘調査例も北東方向に集中する傾向があり、これらの状況から中道遺跡周辺の千曲川左岸沖積地上における古代の集落は中道遺跡Ⅱの北東地域周辺を境とし、片貝川の流れる南・西方向に向かって消滅または減少し、逆に千曲川の流れる北・東方向に広く形成されていくものと考えられる。

### 遺 物

本遺跡からは縄文時代から古墳時代の遺物が出土した。縄文土器は2条の継ぎ沈線の区画内に斜行沈線を施す縄文時代中期後葉の土器と思われるが、出土は2片と僅かである。弥生式土器は器形の全体を伺えるものは出土せず、すべて小破片である。口縁・体部外面に櫛搔波状文、頸部外面に櫛搔簾状文、一部の土器に赤色塗彩が認められ、弥生時代後期の特徴を有する。古墳時代になると資料が増加することから本遺跡の北東において平成6年に発掘調査を行った寺添遺跡発掘調査報告書を参考に時期分類したい。

寺添遺跡では出土した土器を古墳時代後期（I期）～奈良・平安時代（VI期）に分類し、I期5世紀後半、II期6世紀前半、III期6世紀後半、IV期7世紀前半、V期7世紀後半、VI期8世紀代に位置付けている。本遺跡では時期の確定ができ、遺物の状態が良好な住居址は5軒と僅かだが、I・II・IV期に分類可能であった。

I 期	H 3・H 7・H 8	6世紀代	H 6
II 期	H 15	7世紀代	H 10
III 期	該当なし	古墳時代	H 4・H 12・H 16
IV 期	H 11	古墳以降	H 1・H 5・H 9・H 13
		不明	H 2・H 14
		弥生時代	H 17

	环	钵	高环	臺	小型甕	壺	
I	H3-1 H3-2 H3-3 H3-4 H3-5 H3-6 H3-7 H3-8 H3-9	H7-1 H7-2 H7-3 H7-4 H7-5 H7-6 H7-7 H7-8 H7-9	H4-1 H4-2 H4-3 H4-4 H4-5 H4-6 H4-7 H4-8 H4-9	H5-1 H5-2 H5-3 H5-4 H5-5 H5-6 H5-7 H5-8 H5-9	H11-1 H11-2 H11-3 H11-4 H11-5 H11-6 H11-7 H11-8 H11-9	H15-1 H15-2 H15-3 H15-4 H15-5 H15-6 H15-7 H15-8 H15-9	H1-1 H1-2 H1-3 H1-4 H1-5 H1-6 H1-7 H1-8 H1-9
II							
III							
IV							

第500圖 中道灘層貝土器皿年表 (古漿時代)



中道道路Ⅱ遠景（西から）



中道道路Ⅱ全景（南から） H 9年度調査区



中道遺跡Ⅱ近景（西から）H 9年度調査区



中道遺跡Ⅱ全景（垂直）H 9年度調査区



中道遺跡Ⅱ全景（南東から）H11年度調査区



中道遺跡Ⅱ全景（南から）H13年度調査区



H9年度調査風景



H9年度調査風景



H11年度調査風景



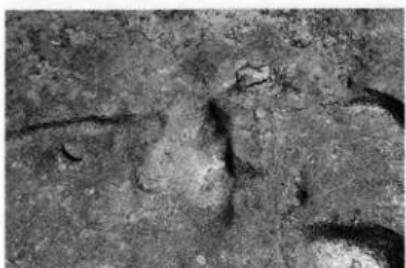
H11年度調査風景



H13年度調査風景



H 1号住居址全景（西から）



H 1号住居址カマド（西から）



H 1号住居址掘方（西から）



H 2号住居址全景（南から）



H 2号住居址掘方（南から）



H3号住居址全景（南から）



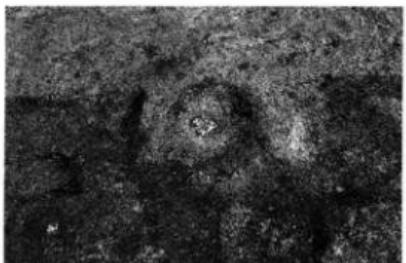
H3号住居址遺物出土状況



H3号住居址東方（南から）



H4号住居址全景（南から）



H4号住居址カマド（南から）



H4号住居址カマド掘方（南から）



H4号住居址掘方（南から）



H5号住居址全景（南から）H9年度調査分



H5号住居址掘方（南から）H9年度調査分



H5号住居址全景（東から）H11年度調査分



H5号住居址掘方（西から）H11年度調査分